

# Tangolandia

春  
2014

日本タンゴ・アカデミー会報



## 目次

会長退任あいさつ タンゴの感動を一人でも多くの人々の胸に.....	島崎長次郎	2
わたしのひそかに愛するタンゴ Caminito .....	高場将美	3
思い出のタンゴ喫茶巡り (第9回) “チ・ケ” (大阪・西田辺) .....	山田建雄・吉澤義郎	7
私の愛聴盤 (第5回) .....	影山雅英	9
Tango Bar めぐり (第3回) “Bar Porteño” .....	町田静子	15
「タンゴこぼれ話」(新連載第1回) .....	弓田綾子	17
嵐子よ、安らかに眠れ! .....	大類善啓	20
María de la Fuente を唄んで .....	飯塚久夫	26
Nelly Omar さんを唄んで .....	高場将美	28
ぼくの神田・神保町、ミロンガ.....	池田博充	32
気楽なブエノスアイレスひとり旅.....	佐藤 進	36
2013年東京タンゴ祭りを聴いて (2013/10/14) .....	山本幸洋	41
金沢蓄音器館 タンゴ・コンサート (10/26-27) .....	松本外司	43
Sayaca を聴く (10/31) .....	脇田富水彦	45
小松亮太デビュー 15周年記念ライブコンサート (11/9) .....	大澤 寛	47
オルケスタYOKOHAMA演奏会を聴いて (11/10) .....	杉山滋一	49
Nochero soy SP レコード・コンサート (12/23) .....	佐藤 進	53
第52回 (2013年) タンゴ・ワセダ・リサイタルを終えて (12/24) .....	藤木立夫	55
タンゴの歴史講演会報告 (2014/1/11 ~ 13) .....	齋藤富士郎	59
池田みさ子とロス・アミーゴス定期演奏会を聴いて (3/22).....	島崎長次郎	60
会員アンケート「Chiqué 3曲選」第1回発表 .....		61
新・訳詞コーナー「Chiqué (1) .....	大澤 寛	66

NTA 会長退任のあいさつ

## タンゴの感動を一人でも多くの人々の胸に、、、

島崎 長次郎

(名誉会長)



会員の皆様には、ますますご清栄のこととお喜びを申し上げます。

さて、すでに先の“Tangueando en Japón No.33”でご案内のように、私は今回の役員の改選期にあたり、後任に飯塚久夫氏を推戴し、会長を退任いたしました。これにより新年度の役員の陣容が整い、日本タンゴ・アカデミーは心機一転、また新たなスタートを切ることになりましたのは何よりのことで、心から同慶の意を表しますとともに、今日まで微力な私をご支援下さった皆様方に、あらためて衷心から厚くお礼を申し上げます。およばずながら、私も側面からできる限りの支援を今後ともに続ける覚悟でありますので、引き続きこれまでと同様、新執行部になお一層のご支援とご協

力を賜りますようお願い申し上げます。

顧みますと、前任会長の高野氏から任期途中で会長を引き継いでからの4年3カ月の間、お陰をもって諸行事も順調に消化でき、会員数も順調に伸び、200名が指呼の位置にまで至ったのは大きな喜びであり、感謝に耐えないところであります。

ご存知のとおり、当日本タンゴ・アカデミーは平成10年（1998）2月、大岩祥浩初代会長を中心に発足し、爾来“わが国のタンゴ愛好家を自認する者の全国組織”を誇りに今日まで諸活動を続け、満16年になりました。その間に、大岩祥浩さんをはじめ、石川浩司、蟹江丈夫、芝野史郎、杉本栄男、さんなど、会のために尽力された何人もの錚々たる役員を失ったのは、誠にもって痛恨の極みであります。会の目的でもある「タンゴの研究とその普及」をここで全員が再確認し、今後なおいっそうの発展をはかることで、先人の遺志に報いたいものです。

“タンゴの感動を一人でも多くの人々の胸に、、、”これをモットーに会員が力を結集してこれからも、是非頑張ってください。

会長を退任するにあたり、お礼と、誓いと、お願い、を申し上げます。



# わたしのひそかに愛するタンゴ

## カミニート (小径) Caminito



高場 将美



この連載の題名は、内容に一致しないときがあるが、お許しください。今回に関しては、「ひそかに」が、こんな有名な曲に対して変だけれど、理由はあとでお分かりいただけると思う。「愛する」は「愛した」と過去形にするのが正しい。ぜんぜん愛がなかった、むしろ不快だった時期が長くある。あんまり多くの人が、あんまりいつも歌っていると、曲の価値がすり減って、ただ曲が流れているというだけの存在になってしまう。わたしにとって『カミニート』は、「またか！もういいよ！」という曲になってしまっていた。

スペイン語では過去形にふたつあって、ひとつは「愛した」と簡潔に過去のことを述べる時制、これは完了過去形といって、元来は（2千年前のラテン語の時代だが）そのことが過去にあったが、すでに完了して、いまはそうではないというニュアンスを含む時制だ。もうひとつの過去形は、非完了過去と名づけられ、終了のニュアンスは含まずに、過去にそういうことがあったと物語るための時制だ。わたしにとって、『カミニート』への愛は、すでに終了していた。（繰り返して申しますが、いまは、ちゃんと現在形で、愛しています。いちばん愛しているとは言いませんが）

話せば長いことながら、1945年の終戦（日本の降伏宣言）の数ヶ月前に、東京に住んでいたわたしの一家は、父の生家がある広島県双三郡（ふたみぐん）の山間の小さな村に疎開した。わたしは満4才の前後だったはずだ。その前の大空襲のこととか、3日ぐらいかかって大混雑の汽車で行った旅の、2つ、3つの短いシーンはとてもよく覚えているが、あとはまったく記憶がない。

ほどなく、山を下りて、1里（4キロ、徒歩1時間）離れた町に住むようになった。そこで小学校に入り、1～2年のころ、父がハーモニカを買ってくれた。今から考えると、びんぼうな家で、楽器なんか——いくら安くても——とても買える余裕はなかったはずだ（町全体がびんぼうだった）。父は小学校の教員をしていたので（中学も同じ校舎だったから兼任？）、なにかのコネとか、見本をもらってきたのかもしれない。

まわりに歌や音楽はまったくなかった。毎晩1時間ラジオを聴くのが唯一の娯楽だったので（演芸番組がおもだった）、番組のテーマ音楽とか、漫才やお笑いグループの歌とか、落語の前後のおはやし、それに浪花節が、わたしの接していた唯一の音楽だった。わたしには、それが音楽だという意識はまったくなかったけれど。

歌謡曲や童謡の番組とか、のど自慢もあったはずだが、家では聴かなかった。ラジオの電気代も節約で、一家で、夜の1時間だけ寝床の中で聴いていた。電灯はもったいないから消して、暗闇の中で、みんなで聴いた。落語が聴ける夜は、しあわせの極致だった。

そんな、音楽は限りなくゼロに近い環境の中、学校に音楽の時間はなく、で、わたしはハーモニカに夢中になった。

ハーモニカといっしょに、簡単な吹きかたの解説が付いた、小さな楽譜集をもらった。

ハーモニカの楽譜は（今のことは知らないが）5線譜を数字に置き換えたものだった。「ド」の音は「1」という数字で表わし、2 = レ、3 = ミ……となる。休止符は「0」である。数字だけなら4分音符、下に横線が1本あれば8分音符、2本なら16分音符、など音の長さもわかる。後ろに「・」が付けば付点音符、「-」が付けば、音を伸ばす。

——そういう説明をよく読んで、そのとおりに吹いていくと、ちゃんと1曲になって聞こえる！わたしは熱中しましたね。

なにしろ、「荒城の月」も、童謡すらも、まともに聴いたことは一度もない、まわりにまったく音楽のない環境にいたわたしには、自分のハーモニカから、いろんな曲が流れ出すことが（ほとんど全部が初めて耳にする曲）、うれしくて、うれしくて……。子どもだから、外で遊んだり、教科書やノートの空いたところに漫画の落書きをしたり、おもしろいことはたくさんあったけれど、ハーモニカに酔いしれている時間はかなり長かった。

そのハーモニカ曲集の中に、どういうわけか『カミニート（小径）』があったのである。「こみち」と読んでいた。題名は、わたしにはどうでもよかった。また、歌詞は（日本語訳詞さえも）なかったもので、内容は知らなかった。作者名は横文字で書いてあったと思う。

この曲だけ、ほかの曲とぜんぜんちがう音楽で、初めてちゃんと吹けた（自分でそう思えた）ときのうれしさは、とてもことばであらわせない。ものすごく魅力的だった。最初の部分（前奏）に Milongueando という指定がある。それがどういう意味なのか見当も付かなかったが（もちろん、ちゃんと発音もできなかった）、こういう感じをこういうんだなあと思勝手に納得していた。音楽用語なんだから、イタリア語なのだろうと思っていた。

（後になってわかったことだが、当時の日本では外国の出版楽譜をそのまま写真製版した——海賊版なのだ——楽譜がふつうに出回っていたので、ハーモニカ楽譜も、そこにある指定などそのままに掲載していたのだ。）

Milongueando という指定は、作曲者フアン・D・フィリベルト Juan de Dios Filiberto 本人がしたものだが、彼の祖父（イタリア移民）はダンス酒場を開いていたこともあったので、「昔のタンゴのダンスの気分で」といったような意味だろう。

そういうことは、小学生のわたしは知らず——いや、それどころか、アルゼンチンという国名も知らず、この曲がタンゴだということも知らなかった。でも、ト・トン・ト・トン・ト・トというリズムが、いっしょうけんめい考えてようやく吹けたときの感激！ほかのどの音楽にもない（当時のわたしにはそうだった）このリズムの魅力は、すごかった。もっと、こういう音楽を吹いてみたかったが、見つける手段はなかった。

（次の楽譜は、わたしのハーモニカの「ハ長調」で書きました。コードは、ハーモニカの楽譜にはなかったけれど、付けておきます。また元は4分の2拍子だったはずですが、今日のタンゴの書きかたの基準である4分の4拍子に直しました）





この前奏につづいて、転調して第1部になる。ハーモニカを取り替えないといけないのだが、わたしは同じ楽器で吹くしかない。すると――

「ラド／ミーミミ／ミーミミ／ファーミミ／ソーファミ／ミーレレ／レレレ＃ド／レー」

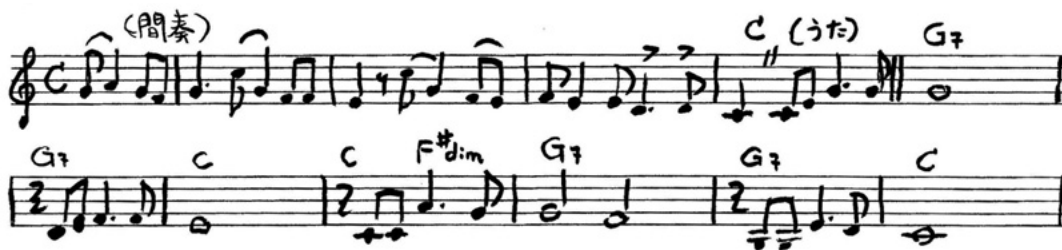
これは、ほとんど起伏がなく、吹いてもまったくおもしろくない。おまけに、わたしのハーモニカには「＃ド」の音がない（短調では必須の「＃ソ」も含めて臨時記号の付いた曲は吹けないのです）。想像するしかないのだが、自分で吹くハーモニカ以外にたよる音はない、ほかの演奏を聴く機会などないのだから、想像なんかできない。わたしが初めてちゃんと聴いた音楽(?)は、自分のハーモニカから出てきたものだけで、そこには臨時の半音は存在しなかった。こういう音感教育の欠陥は、現在のわたしにもついてまわっている。やれやれ……。

中学生になって小遣いを貯めて、トーネットという楽器（リコーダーの簡素なもの）を買い、半音に満ち満ちたジャズ・ソングでもなんでも吹けてうれしかった。でも、『カミニート』の第1部のメロディは、ハーモニカのときより少しはマシだったが、やっぱり短調でつまらなかった。

この曲『カミニート』に関しては、わたしの記事「タンゴ作詞家列伝」の、コーリア・ペニャローサ Gabino Coria Peñalosa の項で書いた（『タンゲアンド・エン・ハポン』誌第33号）。曲のできたいきさつなどは、そこにあるので省略させていただくが、この第1部は、フィリベルトは詩に合わせて、オペラのレチタティーヴォ（物語る部分）のように、わざわざ起伏のない、語り口調のメロディを付けたのだろう。詩に合わせる前の作曲では、もっとタンゴらしいリズムと、器乐的な起伏のあるメロディだったに違いない。

わたしの想像だが、そしてたぶん間違っていないと思うが、フィリベルトが最初につくった第1部は、さっきの前奏や、次にご紹介する間奏と似た感じの、リズムをもったメロディだったろう。歌詞が付く前の『カミニート』は、全体的には、同じ作曲者の『マレバーヘ（やくざ仲間） Malevaje』に似た感じの曲だったろうと思う。

さて……第1部で、なんだかわからないメロディを吹いて、しょげていたわたしは、間奏になって、がぜん元気いっぱい。つづく第2部も、気持ちいい。



この間奏の、音を引っかけるところは、幼稚な小学生のわたしには最高の音楽技術で、たいへんな快感をおぼえた。ハーモニカ楽譜にも、スラー（音をつなげる記号）などは、ちゃんと書いてあり、指定どおりに気をつけて、付点音符も正しく長さを守ると、ほかのどの曲でも味わえな

い、乗りの楽しさが、わたしの体をいっぱいにした。

第2部は、朗々として、くったくがなく、伸びてゆくしあわせさ！ ずっと後年、アストル・ピアソラとおしゃべりしていて、偶然、こんな話になった。

アストルいわく——「このあいだ、生まれて初めて、イタリアの南のほうへ旅行したんだ。どこへ行っても、民謡みたいなのが聞こえてくると、みんなフィリベルトのタンゴみたいなメロディなんだよ。彼の音楽は南イタリアが原点だったんだね。『白いスカーフ El pañuelito』の出だしとかね」

「あの『カミニート』の第2部もそう？」

「まさにその通り！ 民謡の盗作かもしれないな、ハハハハ」

小学生のわたしは、イタリアの血が流れた音楽だなんて、もちろん、ぜんぜん知らなかった。でも、なんだか底抜けに明るくて、でもそれだけではない、見知らぬ土地なのに、どこか懐かしい気持ちにさせてくれる空気をもった、郷愁（そんなことばは知らなかったが）にあふれた、この第2部のメロディは大好きだった。

……わたしが、たったひとりで、ひそかに愛した『カミニート』は、前奏と間奏と第2部だけだった。第1部は飛ばして吹いていた。

その10年ほど後には、歌詞も知ることができて、第1部のほうが好きになった。

歌詞がわかってからは、カルロス・ガルデル Carlos Gardelのレコードでたいへん感動した。その後、初演者イグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini の歌も聴いて、またまた感動した。

作曲家フィリベルトが、この曲のインスピレーションを得たという小径は、古くはプンティーン（イタリアのジェノヴァ方言で、小さな橋という意味）という川があったのを埋めて、港と連絡する貨物用の線路が敷かれた。貨物線は1920年代に（この曲が作られる数年前）廃線になり、その跡地は、ほとんどゴミ捨て場ようになっていたそうだ。曲が有名になったので、1959年に改装されて記念スペースになった。この新しいカミニート遊歩道については、わたしはなんの感慨もありません。ブエノスアイレスを訪れても、そこには行った覚えがありません。



●昔のカミニートの写真はとても状態が悪かったので、絵にしました。  
想像でおぎなってください。（高場 将美）

\*この曲をYouTube で聴きたい方は——コルシーニ歌 <http://youtu.be/ggkH3PWDCoM>  
ガルデル歌 <http://youtu.be/uw-NwgsrNbo>

# 思い出のタンゴ喫茶巡り(第9回)

現在も盛業中の珈琲専門店

## 純喫茶「チ・ケ」(大阪)

山田 建雄 (京都市)

吉澤 義郎 (吹田市)



「チ・ケ」の看板

関西に残るただ一軒、現在も盛業中の大阪・西田辺のタンゴ喫茶店「チ・ケ」をご紹介します。1959年(昭和34)に開店された(当時の日本ではラジオ、テレビ、ダンスホール、ナイトクラブ、タンゴ喫茶、演奏会等で毎日がタンゴで溢れかえっていて、大阪では「オルケスタ・ティピカ大阪」が活躍していた。このお店「チ・ケ」は昭和34年(1959)5月5日に「お嬢様のアキさんの誕生日と端午の節句を兼ねて」の開店予定だったのが少し遅れて開店されたそうです。

当時32歳、現在85歳であられるお店のマスター中西俊二さんはオスバルド・プグリエーセの大ファンだったそうで、巧緻適確を極めたアンサンブルに心を打たれ、当時プグリエーセを代表する演奏曲「Chiquéチケー」をお店の名前に付けたとのこと(その11年後の大阪万博の年に改築された)なおカタカナ表示の“チ”と“ケ”の間に黒点を入れたのには特別な意味は無く「感覚的なもの」とのことでした。

お店に入って先ず一番に目に入るのは、J. ダリエンソ、C. ガルデル、E. M. フランチャーニ、O. モンテス、F. カナロなど往年の巨匠たちの写真やタンゴ・アルヘンティーノのダンスの写真など、適確なシャッター・チャンスの素晴らしい写真がズラリと飾ってあるのが目に入ります。アンプは真空管が使用されているものです。

常にはお店には出られないマスターが、私たち(山田・吉澤)の「Tangolandia」の取材のためとお願いしたところ、わざわざお店に出て来て頂いて、長時間コーヒーを頂きながら数々の思い出を伺いました。2012年の12月に他界された奥様の泉子さんはE. M. フランチャーニのファンであられた由で「夫婦でプグリエーセとフランチャーニを追っかけました」とのことです。愛蔵の写真アルバムも沢山拝見しました。永年収集された写真もレコードのコレクションも、今のところ公開される予定はないとのこと、勿体ないお話だと我々は思いました。

お店の誕生については、杉本栄男さん(大阪タンゴクラブ会長・当時)や熊谷和典さん(大阪中南米音楽研究会会長・当時)などのタンゴ仲間が集まって語り合う場所としてこの喫茶店を始めたとのこと。当初リクエストは受け付けないことにしていたが、ファンと親しくなりあれ



店内の壁一面に飾られた写真を背に  
中西俊二さんとアキさん

やこれやと話し合う内に仲良く聴くようになって、大阪の淡路でも5年ほどの間、同じ名前のタンゴ喫茶を営業された由。その他、大阪南の角座の横での出店の話もあったのだが、諸般の事情でこれは取りやめとなったそうです。

そして、これまでに収集された愛蔵の約3,000枚の、即ち日本で発売されたLPのほぼ90%を所蔵されている訳ですが、今では大変貴重なレコードを見せて頂きました。ブエノス・アイレスには2度

行かれており、一度目は、商売のコーヒーの下見の仕事で中南米へ行かれた折に、もう少し先に足を伸ばしてブエノスまでタンゴを聴きに行かれたのだそうです。そして二度目は、アルマンド・ポンティエールの娘さんの結婚式に招かれて、一人でブエノスへ行かれたのが一番の思い出のことです。

そしてお店には「オルケスタ・ティピカ東京」の御大・早川真平初め刀根研二さん、関塚大八郎さん、河内敏昭さん、脇精一さん、京谷弘司さん、歌手の阿保郁夫さんやグラシエラ・スーナさんなどの一流プレーヤー、そして評論家では高橋忠雄さん、山本満喜子さん、中島栄司さんや志賀山勢州さんなどの方々も一度は訪れたことのある伝統を誇るお店です。

最後に、マスターに現在の日本の楽団や演奏者についての感想を伺ったところ「若い演奏者が増えて来たことだし、もっとファンが増えて演奏の機会が多くなって行けば良いと思う。皆さん、頑張ってほしい」というお言葉でありました。

供されるコーヒーは独自のブレンドでコクある専門店ならではの味で歴史を感じさせる風格のある好いお店です。マスターの精神をお嬢様に引き継いで頂き、マスターにはいつまでもお元気でタンゴのお話を聞かせて頂きたいと思いつつ、お店を後にしました。

尚 お店は

大阪市阿倍野区长池町21-14 電話06-6628-1541

土、日、月、祝日 海外の演奏家の公演日、年末、年始は休業

営業時間 10時30分～18時30分





# 私の愛聴盤

～第5回～

影山 雅英 (藤沢市)

## ●自己紹介

2007年タンゴ・アカデミー入会、年末横浜プーロタンゴ入会。タンゴ歴今年で60年、大学時代(1954年)友人の誘いでタンゴ喫茶(ミロンガ、モデルン)へ通う。レコード蒐集を始める。好きな楽団「パチョからピアソラ」までと言っているが、第二次黄金時代の楽団中心。最初は国内盤EP、SP購入、古レコード屋回り中古レコード探す。輸入盤は「中南米音楽」の中西氏の所で購入。愛聴盤は時代によって変化しているので、タンゴの歴史を追って紹介する。



## ●タンゴ草創期

「エル・カチャファス」マヌエル・アロステギ曲 ホアン・マグリオ “パチョ” 楽団

Columbia TX760

1912～13年にかけてコロンビア・レコードより94曲、47枚のレコードが発売され大好評を得た。当時はレコードを買いに行くことを“パチョ”を買いに行くと言われていたそうだ。パチョは左利きで、バンドネオンの低音が良く出て、音楽に温かみがあるのが、大衆に受け入れられたのだと思う。今聴いてもフルートとバイオリンの高音にパチョのバンドネオンが良く絡む楽しい演奏で、トップリーダーとしての大活躍がよくわかる。13年には会社の共同経営者になりレコードのラベルに自分の顔が入った盤が売り出された。演奏曲目も当時流行していたタンゴが多くゲアルディアビエハの名曲として現在でも演奏される曲が多い。資料としても大変貴重だ。ただ、レフコビッチのデイスコグラフィにはコロンビアのTXシリーズは載っていない。又、二年間にラベルが三回変わっている。当時はアルゼンチンではレコード制作が出来ず全て輸入盤でドイツ、アメリカやブラジルで作られていた。TシリーズとSシリーズはブラジル製と書いてあるがTXシリーズには書いてない。謎である。



## ●アコースティック時代

「ミ・レフーヒオ」(私の隠れ家) ファン・カルロス・コビアン曲  
ペドロ・ヌーマ・コルドバ詞 オスバルド・フレセド楽団

Victor 73368

1920年フレセドはニューヨークでオルケスタ・テイピカ・セレクトを率いて50曲程録音する。このレコードはアルゼンチンでも高く評価され、かなりの枚数が売れたようであり、同時にフレセドの人気も急速に高まった。帰国後再び楽団を結成、レコーディングも精力的に行った。その二枚目が上記のレコードである。バイオリンの低音でメロディーを弾き軽快なテンポで曲を引っ張っていく。作曲者コビアンの甘いメロディーが印象的だ。中頃にコビアン自身のピアノ・ソロが入り曲を盛り上げていく。この曲は



タンゴ歌手が歌うには音域がやや広く、歌詞も甘過ぎるので楽団演奏でメロディーを歌い上げる曲として、コビアンの他の作品同様、時代が新しくなるほど愛されて今日に至っている。カルロス・ディ・サルリ、オラシオ・サルガン、オスバルド・ベリンジェーリ等に多大な影響を与えている。

「ジョ・テ・ベンデイゴ」(君に祝福を) ファン・デ・ディオス・フィリベルト曲  
ファン・ブルーノ詞 フランシスコ・ロムート楽団

Odeón 7653

女に捨てられた男が別れた女に「一緒にいた時は幸せだった」「今は君に祝福を贈る」と歌う当時のヒット曲。オデオン五大楽団が競演している。演奏には歌は入らずダンスを意識してか、ゆっくりしたテンポでバンドネオンの低音にバイオリンのピチカットが絡んでいく。1947年にオスバルド・プグリエーセがロベルト・チャネルの歌で、アニバル・トロイロもエドムンド・リベロの歌、オラシオ・サルガンが1951年にオラシオ・デバルで、61年にエドムンド・リベロでと多くの楽団が録音している。



## ●第一次黄金時代

「レクエルド」(思い出) オスバルド・プグリエーセ曲 エドアルド・モレーノ詞  
フリオ・デ・カロ楽団

Victor 79778

20年代以後近代タンゴに多大な影響を与えたフリオ・デ・カロ楽団のレクエルド、この曲はプグリエーセが19才(1924年)の時に作曲した。プグリエーセが所属するファン・ファバ(バンドネオン)四重奏団が初演したが、全く注目されなかった。25年半ばカフェABCでプグリエーセが所属するエンリケ・ボジェー(バンドネオン)四重奏団が演奏して評価される様になった。26年六重奏に増やしてカフェ・エル・パルケに出演中、ペドロ・ラウレンスがこの曲を聴いて、彼がプグリエーセ自筆の楽譜を、所属する楽団のリーダーのフリオ・デ・カロに届けた。そしてデ・カロが編曲して同年12月に録音したのがこのレコードである。ほぼ同じ頃、ビクターより女性歌手のロシータ・モンテマルが録音(Victor 79890)しているが、こちらはプグリエーセが作曲したメロディーを歌っている。この二つの録音を聴き比べるとデ・カロの編曲の素晴らしさが良く

わかる。1944年にプグリエーセ自身の楽団で録音しているが、編曲は全くそのまま変えずに演奏している。20年近く経ってもデ・カロの編曲はそのまま通用するということで先進性を示していると思う。そして又プグリエーセがデ・カロを尊敬していた証拠であると思う。プグリエーセはあるインタビューで“あなたはデ・カロの影響を受けているか？”と質問された時デ・カロは“木に例えれば真ん中の幹である。現代の楽団は皆枝である。それ程デ・カロは偉大な演奏者だった”と答えている。

「アデイオス・アルヘンティーナ」G. H. マトス・ロドリゲス曲 F. S. バルデス詞

フランシスコ・カナロ楽団

Columbia M340

私が初めて買ったタンゴのレコード二枚の内の一枚。最初は裏面のフィルポのエル・アマネセルで買ったレコードで、鳥の鳴き声が入るレコードと店員に告げて購入した事をよく覚えている。家で聴いているうちにカナロの演奏にどんどん引き込まれていった。恋に敗れ母国アルゼンチンを去っていく男の心情が感傷的なメロディーで迫ってくる。特に最後のバイオリンはカジェタノ・プグリッシの最高の名演だと思う。この曲は他にオルケスタ・ティピカ・ビクトルとアルベルト・ビラの名唱がある。近年は殆ど演奏されないのが残念だ。



## ●AMP-LP 「NUNCA」から私の好きな曲を選んだ。

「ラ・マレーバ」アントニオ・プグリーオーネ曲 マリオ・バルド詞

ロベルト・フィルポ楽団

Odeón 8662

この楽団の最高の演奏だ。大変センチメンタルな曲だがメロディーが美しく、特に大草原の民謡を思わせる旋律をバイオリン（プグリッシ）が弾き、そこへピチカートが絡んでいく所は素晴らしい。この曲は後年種々の楽団が録音している。特に1962年のトロイロ・グレラ、1950年のピリンチョ五重奏団は名演だ。

「アラバレーロ」オスバルド・フレセド曲 エドアルド・カルボ詞

オスバルド・フレセド楽団

Odeón5120

自作自演1927年2月発売、3月フィルポ、5月カナロ、ガルデル、6月パチョと連続してオデオンから発売された。特にインストゥルメンタルの四楽団は大変似ている演奏だ。最初の部分を聴いただけでは区別がつかない。多分この頃はレコード会社の指導がきつくダンス用に演奏させたのではないと思われる。その中で各楽団が少しでも特長を出そうと頑張っている。フレセドは従来通りバンドネオン・ソロは使わず、ベースを利かせたリズムでバイオリン主導で美しく演奏している。カナロは途中にバンドネオン・バリエーションが入り曲の後半に変わったバイオリンのオブリガードで変化を付けている。フィルポはマエストロのピアノがフレーズとフレーズとの間を繋ぎバンドネオン・ソロで盛り上げる。パチョは前半にバンドネオン・ソロを持ってきて、最後にバイオリン・ソロで締めている。ガルデルは、やくざな男であっても愛さずにいられない純な気持ちの下町娘を甘い声で唄っている。いずれ劣らぬ名演である。その後1957年アルフレッド・デ・アンジェリス楽団（歌オスカル・ラローカ）2005年女性歌手リディア・ボルダが録音し

ている。

「カベソン」(頑固者) アドルフォ A. ペレス “ポチョーロ” 曲

ホアン・マグリオ “パチョ” 楽団

Odeón7584

昔この楽団にいて、パチョの死後遺志を継いだペレスの作曲。当時の新しい傾向としてバンドネオンの変奏を取り入れた演奏だ。楽しくソロを弾いているのがパチョ自身か、又客演で作曲者のポチョーロなのか考えるとわくわくしてくる。

「シン・クレメンシア」(容赦なく) ルシオ・ダゴステイノ曲

フランシスコ・ロムート楽団

Odeón7859

20年代末か30年初頭の作品、ロムート楽団固有のレパートリーで他にレコードが無い。このような器楽曲においても的確なリズムで豊かな音を作っている。名演である。

## ●シンフォニック・タンゴ

「ヌエベ・デ・フリオ」(7月9日) ホセ・ルイス・パドゥーラ曲

フランシスコ・カナロ楽団 (セリエ・シンフォニカ)

Odeón4615

1920年末期、カナロはタンゴをより発展させなければならぬとの思いで「セリエ・シンフォニカ」シリーズを発売、この狙いは的中した。演奏家としてカナロの地位は不動のものとなった。オデオン・レコードのブルーのレーベルに金の文字入りで風格とともに広く大衆に受け入れられた。この演奏も堂々とした風格に情熱的なセンスを織り込んだ曲想が人々の心をとらえる。カナロはアレンジに変化をつけているが、必ずしも成功しているとは思えない。しかし、全体としてカナロ風にまとめあげて纏め上げているのは流石だと思う。

## ●古典タンゴへの回帰

「フェリシア」オラシオ・ペトロッシ曲 アルフレッド・ナバリーネ詞

ロベルト・フィルポ四重奏団

Odeón 3505

1930年代後半ファン・ダリエンソの電撃的リズムで古典タンゴの復活が始まる。フィルポも四重奏団を組織しオデオンに録音を始める。1910年代の作品を中心に古典タンゴをレパートリーとし、いささか粗い演奏だが「フェリシア」は名演だと思う。



## ●第二次黄金時代

「パテティコ」(悲愴) ホルヘ・カルダラ曲

アニバル・トロイロ楽団

ポリドールD10003

オスバルド・ブグリエーセ楽団

Odeón 7697

学生時代古レコード店を回ってタンゴのレコードを探していたが、ある時喫茶店ミロンガでタンゴを聴いて帰るとき近くの古レコード店に寄ったら店主が話しかけてきた。アルゼンチン・タンゴを探していると言ったら店の奥から持って来てくれたのがポリドール発売の三枚組のアルバムだった。「JOYAS DE LA MÚSICA ARGENTINA」(アルゼンチン名曲集) 解説によると、戦後第一回目に我が国を訪れたアルゼンチン汽船「リオ・アグアペイ号」マトピチ船長託送で



SADAIC（アルゼンチン音楽作詞作曲家著作権協会）より送られたタンゴの新曲レコード数十枚を、放送局、レコード会社、その他アルゼンチン音楽愛好家を集め日本音楽著作権協会で試聴会を行った。その時一番評判が良かったのがトロイロの「ひとしずくの涙」だった。その中の三枚をダビングしてアルバムにしたもの。早速購入し家で聞いた時私が感激したのがパテティコだった。今まで聴いていたタンゴとは異なり、日劇で聴いたフアン・カナロ楽団の演奏に近く、独自のハーモニーを持った新しい奏法で驚かされた。作曲者がティピカ東京の演奏会で素晴らしいバンドネオンを聴かせてくれたホルヘ・カルダーラだった。プグリエーセの録音が有ることが分かり馬場氏にお願いして私のSPと交換して貰った。録音当時カルダーラは第二バンドネオン奏者として在籍していたので最後のバンドネオン・ソロはカルダーラが弾いているのかもしれない。甲乙つけがたい名演である。

「ア・ロス・アミーゴス」（我が友に）アルマンド・ポンティエル曲

フランチャーニ・ポンティエル楽団

ビクター EP1078

エドアルド・ロビーラ四重奏団

（私家盤）

私が大好きな曲、ピアノとベースとバンドネオンによるスイング感にはポンティエルの性格から来ていると思われる。フランチャーニのソロはバイオリン・コンチェルトでも聞くような素晴らしい。ロビーラはアルヘンティア化学という会社が宣伝の為に制作した私家盤、演奏はかなり原曲を崩して編曲している。ロビーラのバンドネオンが大活躍。

## ●アストル・ピアソラの音楽との出会い

TANGO PROGRESIVO オクテート・ブエノスアイレス

Allegro 6001

TANGO EN HI-FI アストル・ピアソラ楽団

Music-Hall 12033

大学四年生の時、高山正彦氏のラジオ番組で「ラ・クンパルシータ」を五楽団の演奏を鎖の様に繋ぎ一曲にして楽団名を当てるクイズが有った。その最後のバンドネオン・バリエーションに感激し、クイズの解答でアストル・ピアソラの演奏とわかった。早速アルゼンチンに行かれる中西氏にお願いした。その時買ってきてくれたのがピアソラの二枚のLPだった。初めて聴いた印象はジャズのジャム・セッションのようだった。各楽器のソロ・パートにおける各自のセンスを発揮し、合奏での一丸となつての熱狂ぶりに、それまでタンゴでは味わったことのない気持ちを味わったのを覚えている。当時私はモダンジャズも並行して聴いていたのでそれ程の違和感は無かった。アレグロのLPジャケットはメンバーの写真の入った斬新なセンスで普通の10インチのジャケットより一回り大判で素晴らしいものだった。フランチャーニのバイオリンとピアソラのバンドネオンが素晴らしかった。タンゴ・エン・ハイファイは弦楽オーケストラによる録音で「ラ・クンパルシータ」が入っていたが、残念ながらクイズに使われた演奏ではなかった。クイズに使われたのは1951年録音のTKのSP盤だったことが後でわかった。このLPでは終始ピアソラがバンドネオンを弾きまくり、エルビノ・バルダロのバイオリン・ソロが印象深かった。

## ●最後に

最近ではテーマを決めて聴くようにしている。例えば楽団の演奏を録音順に全曲聴いてみたり（フランチャーニ・ポンティエル楽団、アニバル・トロイロ楽団、オスバルド・プグリエーセ楽団、等）

同じ曲を色々の楽団で聴く、石川浩司氏の「タンゴの歴史」を読みながら当時の演奏を聴く等、考えながら聴いている。

## ●現在よく聞くCD

**ÁSTOR PIAZZOLLA 「TANGO ZERO HOUR」** American Clave EWSAC 1013  
SACD対応のCDはタンゴではこのCDを含めピアソラの三枚だけである。

生前ピアソラが選んだ最高の演奏である。スーパーCDの臨場感も加わり生で聴いている様な気分だ。

**LEOPOLDO FEDERICO 「SOLOS DE BANDONEÓN」** RGS 1786-2

1993年M&Mで発売された曲に、その後録音して発売されなかった2曲とフェデリコのバンドネオンにオラシオ・フェレルの詩の朗読とカーナ・リベラの歌が入っている。バンドネオンの左右の音を別々のスピーカーから出し、あたかも眼をつむると目の前にフェデリコが弾いている様な迫力がある。キーをたたく音、空気を抜く音まで入っている。演奏も最高、音も最高でバンドネオン一台でこれだけの迫力が出せるレオポルド・フェデリコの面目躍如だ。

**ELVINO VARDARO 「VIOLÍN MAYOR DEL TANGO」** El Bandoneón EBCD 94

バルダーロは有名なバイオリニストでありながら自分の楽団の録音が殆ど無く、この人の名演が入った企画盤で、バルダーロの歴史が良くわかる。1943年迄でその後の名演が入っていないのが残念だ。

**JUAN MAGLIO “PACHO”** EURO EU 17052

“パチョ”のオデオン時代の演奏を録音順に並べた復刻盤だ。EUROは音が良いので名演が引き立つ。この時期“パチョ”楽団には録音時にオデオンの専属メンバーが助っ人として演奏に参加していた。ガブリエル・クラウシ自作の「EN UN RINCÓN DEL CAFÉ」等名演が多数入っている。

**GRANDES ESTRELLAS DEL TANGO** A.M.P. ESP-2003

大岩氏選の24楽団の名曲名演ばかりでいつ聴いても飽きない。永遠の決定盤だ。



## Tango bar めくり 第3回

### 錦糸町「バル・ポルテーニョ」

町田 静子 (杉並区)



JR錦糸町駅を降り、繁華街から徒歩3分、裏道を少し入ったビルの2階に「バル・ポルテーニョ」はある。昨年5月に開店した新しいタンゴスポットだ。1階の階段の登り口と2階エントランスには真紅を背景にアルゼンチンとスペインの国旗が描かれた「Bar porteño」の看板がお出迎えしてくれる。

店内はテーブル席と厨房を囲んだカウンター席。白い壁に真っ赤なテーブルクロス…そしてキヤンドルが灯され、とてもオシャレでスタイリッシュ。

店長の帆足氏はタンゴダンサーでもあり、タンゴダンス講師のアシスタントを務めたこともある。

お店を始めたきっかけを訊ねると「タンゴ教室で知り合ったオーナーが、錦糸町にすでに飲食店を構えていたのですが、もう1件出すことになり、私の経歴を乞われてお手伝いすることになったのです」とタンゴが取り持つ縁を話してくれた。

私が伺ったのは写真撮影をお願いしてあった関係から開店30分前。既に開店時間少し前から若い女性の客が続けて来店し、瞬く間にテーブル席は埋まってしまった。

お料理は本場仕込みの経験豊富なベテランシェフを配しているの、都内でも珍しい本格的なアルゼンチンとスペイン料理をリーズナブルに提供している。メニューが多く、じっくりと選べる。

真っ白なイスのカウンター席に座ると注文した料理がどんだんスペイン語で通されてゆく。ここはブエノス? お客様の意識をくすぐる。店長とシェフの見事な連携振りを感じた。リピート客が多いのもうなずける。

#### 当日いただいたお料理

前菜は「さつまいもとひよこ豆の生ハム巻き及びトマトとアンチョビのブルスケッタ」。ホワイトのプレートに美しく配色されていて食べるのがもったいないくらい。生ハム



は当店の看板メニュー。カウンターの真ん中にはスペイン産のど迫力の骨付きハモン・セラーノ。注文を受けてから丁寧にスライスして、カット仕立てを出してくれる。ピリッとした食感と付け合せのドライフルーツのメロンの甘さがアクセントとなり、とてもジューシー。副菜は「アンチョビとキャベツのグリル」。オープンで焼かれたキャベツは甘みが増し、アンチョビとの相性は抜群。もうひとつアルゼンチン名物「エンパナーダ」のチーズ入りを注文。熱々のパイにとろけるチーズとのハーモニーはたまらない。

締めは店長一押し of スペイン名物「パエリア」。海老、イカ、アサリ、ムール貝などの魚介がたっぷり入り、たくさんの具材の旨みを吸収したお米のパリパリとした食感が格段に美味しい。食事がメインなら外さないで欲しい一品といえる。

そして美味しいお料理に欠かせないドリンクメニューも充実。ソムリエ資格をもつ店長が、お客様のシーンにあわせてアドバイスしてくれる。その日の気分に合わせて酸味の少ないスペイン・アルゼンチン産のワインを飲むのもいいし、ワインにフルーツを加えて飲みやすくしたサングリアもワインが苦手な方にもお薦め。興に乗れば店長はその方のイメージにあわせて世界でひとつのカクテルをシェイクしてくれるかもしれない。もちろんまったくお酒がダメでお食事だけの方も充分楽しめるようソフトドリンクも豊富に取り揃えている。

混んでいる時は無理だが、手がすこし空けば、帆足氏とタンゴのお手合わせも可能。私の友人は何曲か踊っていただき夢心地であった。

フロアには60インチの大型モニターが備えられていて、常時タンゴダンスのDVDや、サッカー、ゴルフ、テニス等のスポーツ中継も流せるようにしている。

4カ月に1度くらいのペースでタンゴ生ライブミロンガも実施。去年は7月にバンドネオンの仁詩さんとギター of 田中康介さんのデュオ、10月にバイオリン of KOKOさんとピアノ of YOKOさんのデュオを企画。参加者は本格的なお食事とワイン・ビール等飲み放題つきで生ライブミロンガを思いっきり楽しむことが出来た。これからもいろいろなライブやスポーツ関連企画を発信する予定だ。

### 店長の帆足氏が今後の抱負を語ってくれた。

「タンゴ関係のお店は東京駅から西に偏っていることもあり、城東地区から千葉県に繋がるこの錦糸町という場所的ニーズはとても大きいと思います。食を通して若い方にタンゴの輪を広げたいし、ゆくゆくは近所のコミュニティの役割を果たしてゆきたいです」……と。

貸切の予約も出来る。普段のお食事（ランチタイムあり）、記念日のお食事、飲みながらのチョコットのおつまみ等、いろいろなシーンに対応できるのが強み。

### ■Bar porteño

住 所 東京都墨田区江東橋 4-25-15 第3東永ビル 2階

電 話 03-3846-0432

行き方 JR錦糸町駅南口下車 徒歩3分



## フランシスコ・カナロの死と遺産

Muerte y herencia de Francisco Canaro

出典：LAS MEJORES ANÉCDOTAS DEL TANGO

著：Héctor Ángel Benedetti  
訳：弓田 綾子



タンゴの世界には誇張した逸話が数多くある。その中でカナロの死後、興味を惹く逸話が音楽家たちの中で飛び交っていた。

それは“〇〇さんはカナロよりもお金を持っている”……と、人気を博している音楽仲間を羨望視してよく引合いに出されたもの。お互いの探り合いなのかも知れないが……。

カナロ自身も生前よく鼻歌交じりにこの種の替え歌を口にしていた。それをちょっと記してみよう。

1939年9月11日にカナロのオルケスタとエルネスト・ファマーの歌で“Mosterio = 見せびらかし”（作詞・作曲：アルベルト・ガンビーノとアリー・サレム・デ・バラハ）というタ

ンゴを録音したが、カナロはこの曲を替え歌にして、いつも口癖のようにし：que por qué De Caro es rico y Canaro millonario, ! Mosterio !（なぜ、デ・カロはただの金持ちでカナロは億万長者なのだろう。モステリオ！と歌っていたのだ。

話題の主フランシスコ・カナロは、バイオリン奏者。皆から“タンゴの王様”として知られているほかに“タンゴはカナロに始まりカナロに終わる”ともいわれている。彼はタンゴ界に大きく貢献した紛れもないビッグアーティストである。

カナロは1964年12月14日、彼が創設した団体“COMAR（アルゼンチン音楽組合）”の事務所で突如倒れ、死因は心拍停止と報道された。

彼は以前から健康状態はあまりよくなく、日頃から様々な病名がささやかかれ、その噂は巷にも広がっていた。しかし、誰ひとりとして本当の病名はわからずにいたが、実は生前カナロから三つの病名をはっきり聞いた者がいる。作詞家でありコラムニストでもあるフランシスコ・ガルシア・ヒメネスである。その三つの病名とは：大腸癌、浮腫（水腫）と動脈硬化。ヒメネスは自分だけが知っていることを、いつも自慢していた。

しかし、カナロは心拍停止状態となり亡くなった。でも、ほんとうの病名は「パジェット病」

(英国の外科医・病理学者：ジェームス・パジェットが発見し、彼の名をつけた) だった。この病気は体の骨が次第に縮まるもので、カナロはこの変形骨炎の痛みに侵され亡くなったのだ。

そして、カナロの死後1ヵ月あまり経った1965年1月20日に、彼の遺言書が発表された。その場にはカナロの三人の兄弟であるファン、ラファエル、マリオと管理人のライネリ、それに奥さんと娘二人の代表として弁護士が出席した。

カナロの全財産は9億ペソ（約300億円）はあると全員が予想していた。だが予期に反して実際の遺産は

①預金額で1千万ペソ（日本円：3億3千万）しかなく、その上に幾つもの銀行口座に分散して預金されていた。

②土地、他の12箇所の不動産の所有権など、総額約2億ペソ（日本円：68億円）だった。

これらの遺産は、奥さんと娘二人に平等に分けることが遺言書に書かれていた。しかしながらカナロの三人の兄弟たちのことは、何故か何も書かれていなかった。兄弟間でなにがあったのかはわからない。でもそのことに対して彼らはどんなに驚き、どんな感想を持っただろうか……。

そのことを知った人たちは、口々にカナロはもしかすると死期を悟っていて、そんな光景を想定し、自身は兄弟たちの慌てふためく姿を承知の上で、あるいは楽しんで遺言を書いたのであろう……と、噂をしていた。

アルゼンチンの誇る偉大なる音楽家フランシスコ・カナロの足跡に、多くの人たちは敬意を表しつつも、こんな逸話を楽しんでいた。



## ☆Francisco Canaro

バイオリン奏者、作曲家、楽団指揮者。

1888年11月26日ウルグアイで生まれ、家庭が貧しかったために苦労を重ねてバイオリンを修得し、タンゴ界に君臨した。

1961年来日。東京コマ劇場を初演に、全国各地16回の演奏を行った。

1964年12月14日ブエノス・アイレスにて死去。享年76才

(タンゴ心酔クラブ会報 2011年10月2日から転載)

# 私の思い出の アーティストたち

弓田 綾子



Ayako, partícula storada del Sol  
Maricute Japonica, recibe mi amor  
surriente a gradecimiento con  
este sentimental apretón de  
manos pleno de admiración y  
afinidad emotiva tan buena  
E. MUNDU RIVERA *E. MUNDU* 24/5/67  
エトランド・リバーロ

A la familia  
Ayako hija del Japon  
tanta hermana desde el  
tayo ha encontrado una patria  
para sentir su corazón por los  
que meyor en nuestro mundo  
se unen en nosotros que nos  
en un amor. Conto copias  
recuerdo. *Berto* 27/1/67  
エトランド・マルコ

Para Ayako  
un recuerdo muy especial  
y cariñoso de  
*E. MUNDU*  
E. MUNDU  
ロベルト・ゴジエネ



# 嵐子よ、安らかに眠れ

—《大連体験》を昇華した藤沢嵐子のタンゴに思う—

大類善啓（葛飾区）

## はじめに

藤沢嵐子が昨2013年夏、亡くなった。享年88歳。訃報が大手の新聞に、また追悼記事が日本タンゴアカデミーの機関誌を始めいくつかの専門誌や冊子に掲載され、偉大なタンゴ歌手を悼む言葉が綴られていて私も共感する内容だった。しかしそこには、旧満洲での体験、とりわけ大連でのことは全くと言っていいほど触れられてはいなかった。



確かに、嵐子は大連のことを語ることはなかった。長年、嵐子のそばにいたギタリストの河内敏昭さんや、付き人のように付き添っていた河内夫人にも決して大連のことは話さなかったという。タンゴ解説者の故・蟹江丈夫もかつて私に、何度も嵐子に大連のことを聞こうとしたけど「もう大連のことは思い出したくもない」と言って堅く口を閉ざしたという。蟹江は「それだけ大連のことは思い出すのも嫌だったんでしょね」と私に語ったことがあった。

思い出したくもない大連での出来事。語ることを拒否した大連の体験。しかし、藤沢嵐子という人間だけではなく、タンゴ歌手・嵐子を語るには、大連での体験は欠かせないものだと私は思っている。「それはお前さんの思い込みだ」と囁かれるのを重々承知の上で、私はそのことについて書いてみよう。

## 故郷を離れるということは・・・

その前に、なぜそれほど私が嵐子の大連体験にこだわるのかを説明したい。それには、どうしても自分のささやかな体験を語らないと納得されないのではないかと思い、少々私の体験話に付き合ってください。

1968年の夏から翌年の4月初めまで、私はヨーロッパに遊び、中東やアジアを回って帰国した。このささやかなヨーロッパ体験は私にとって、言葉の本当の意味で、日本やナショナリズム、アイデンティティについて語ること、考えることの出発点になった。例えば、国際主義ということも、観念のレベルでなく、本当に実感レベルで考える契機になったのである。





初渡亜時、ベロン大統領の前であいさつを読み上げる嵐子

一番長く滞在したのがポーランドだった。と言っても半年ほどの滞在である。そのポーランドで1968年の夏、菊地昌典と話す機会があった。菊地は、学生時代から私が畏敬する歴史家だった。マルクス主義的な世界観を持ちながらも、当時のソ連体制に批判的視点を確固として持っていた。

### 重要な決定的な体験とは

ワルシャワでのその日、小さなホテルの食堂で昼食を取っていると、そこにポーランド人と話している菊地がいた。そのポーランド人が私を日本人と認め、菊地と話をすることになった。無聊をかこっていたのか菊地はその晩、私に部屋に来ないかと誘ってくれた。ちょうど「プラハの春」がソ連東欧軍に弾圧された直後、1968年の夏のことである。

その時、今は亡き菊地がこんな話をした。「その人の人生にとって重要な時期にその場所にいるかいないか、ということはその後の人生や思想的な営為にとって実に大きく、決定的な意味を持つ」。菊地はそう言いつつ、ある日本人のフランス文学者の話をした。この人も、もう故人になっている。仮にM氏としておこう。M氏の著作はその後私も読んでそれなりに共感することもあったが、菊池はその時、こう言った。

「Mは戦後すぐフランスに行き、ずっと長くパリに滞在した。しかし彼の書いたものを読んでも、然るべき日本の人たちは評価しませんよ。焦点がずれている。呆けている。何故か。日本で何が起きているのか、その何かを見ていない。その時、日本にいて体験していない。決定的な時にその場所にいらないということは、とても大きいことなのだ。そういう意味で、来たるべき日本の1970年は、極めて重要である。その時点に日本にいるかいないかは重要な考え方の機軸になるだろう」と語った。

このような趣旨を述べて「予想される1970年の安保闘争は、60年安保闘争の縮小再生産か拡大再生産かに過ぎない。思想的な転換点にはならないだろうと思う」という私の考えに、菊地はM氏の例を挙げて反論したのである。

### 嵐子にとって大連とは

菊地にとってM氏は、世間的にはパリに滞在する著名なフランス文学者だろうが、思想的には語るべきほどの文学者でなかったのである。長く日本を不在にしている男が日本について語ったり書いたりしていても、いやフランスについて書いたとしても、菊地にすればそれがいかほどのものなのか？ という程度に過ぎないのである。菊地の言葉をもっと敷衍して考えると「その人にとって重要な時期と思われる時に、その場所にいるかどうかは、その後の思想や行動に決定的

な意味を持つ」というふうには言えるのだった。

そういう意味で、藤沢嵐子にとって敗戦後の大連は、その後の彼女の人生や、タンゴ歌手にとって決定的な意味を持っている、と私は考えるのである。

## アイデンティティとは何か

当時ワルシャワから1時間ほどの距離にあるウッジ市に、私より一回りほど年長のスラブ考古学を学ぶ30代の研究者がいた。今の私なら、日本人でスラブ考古学を研究するなんて面白い人もいるものだと肯定的に捉えるだろう。

しかし、前述のナショナリズムやアイデンティティなどについて考えていると、なぜ日本人がスラブ考古学を学ぶのか、その内的必然性が私には皆目、理解できなくなったのである。日本人なら、その拠って来たる日本の歴史や民族性、民俗や習慣などの文化を研究することならわかる。日本人としてのアイデンティティを追求する意味で、しごく尤もなことだと思う。それがどうしてスラブ考古学なのか。

ポーランドを離れる直前にその人とそんな議論をした時、彼は「貴方はなぜそんなに日本にこだわるのか」と言われ、「貴方の論理を突き詰めると私の存在は否定される」と言われた。それで私はこの議論を止めた。

思想的にも閉ざされていると思えたポーランドを離れて、当時の西ベルリンに着き『ベルリン・ドイツオペラ』でワグナーの楽劇を観たり、東ベルリン（まだ『ベルリンの壁』があった時代だ）に行き『ベルリナー・アンサンブル』でブレヒトの芝居などを見るにつけ、ますますそのような思い、即ち、自己の民族的な感性などを抜きに真に芸術的表現は難しい、という思いを強くしたのだった。

高校時代から俳優座で千田是也演出のブレヒト作品を見ていた私にとって『ベルリナー・アンサンブル』のブレヒト劇は衝撃だった。言葉がわからなくとも、その緊張感あふれる舞台は日本にはないものだった。

所詮、日本人がワグナーを歌ったり、ブレヒトの芝居をやっても多寡が知れたもの、それは単なる物真似じゃないか。ヨーロッパ人のように歌うことも演じることもできないだろう。その核心に迫ることはできないのではないかと、思ったのである。

## たった一度の嵐子と私の会話

そんな思いを懐いて帰国して2年後の1971年だったか、湯沢修一が主宰するタンゴ鑑賞会「すいよう会」に参加した。ある日、藤沢嵐子が出演し歌った。歌い終えた嵐子に会うべく勇気を出



して控え室を訪れ「タンゴを歌うということに疑問をもったことはないか」といった前述のような思いを嵐子にぶつけた。

嵐子は私の言葉を聞き、こう答えた。「私も何度か悩み、聖書を読んだりしました」。その時嵐子は、まだキリスト教の洗礼を受けていなかったのではないかと思う。

そうか。アルゼンチン生まれのタンゴを歌うことに、日本人である嵐子は本当のところ、歌うことができるのか、プエノスアイレスの人々の心情に添うことができるのか、嵐子は悩みに悩み、キリスト教の聖書を読んでいたのだと思った。単なる流行歌手のような歌い手ではなく、本物の歌手であるからこそ、彼女はタンゴの核心にどう自分が迫ることができるのかと悩んでいたのだとわかり、さすが嵐子、と思ったものだった。

周知のように、嵐子は上野にある東京音楽学校（現・東京藝術大学）を中退し、父が勤めていた会社がある「満洲」の瓦房店がぼうてんに、母と末の弟と一緒に渡った。

瓦房店（中国東北部、大連から北東100kmほどのところ）に着いたのは昭和20年、1945年の元旦だった。＜満洲—ニラの匂い。母はすぐ父とけんかをはじめた。「どうして、こんな臭い、不潔なところへ連れてきたの！」＞。嵐子は続けてこう書いている。＜やがて戦争は終わり、日本は負け、瓦房店の工場は接収されて、父は仕事がなくなった。その時から家計は私がみなければならなかった。＞（『カンタンド タンゴと嵐子と真平と』）

## 敗戦で一変した日本人の地位

1945年8月9日のソ連参戦、続く日本の敗戦は、たちまち攻守ところを変えた。日本の傀儡国家『満洲国』は瞬時に崩壊した。威張り散らしていた日本人たちは狼狽した。中国人や朝鮮人を見下していた日本人は、自分たちが拠って立つ根拠を失った。天国が地獄に変わった。それでも大連をはじめ、ハルピンや新京（長春）、奉天（瀋陽）などの大都会にいた日本人はまだよかったといえるだろう。ソ連との国境沿いに入っていた「満蒙開拓団」の人々の惨状はそれこそ「筆舌に尽くし難い」ものだった。

日本の敗戦によって嵐子の父親は失職した。嵐子は家族を養うため、大連のダンスホールや音楽喫茶で歌い始めた。

## 「大連、思い出すのも嫌！」

大著『大連・空白の六百日』を書いた富永孝子は1931年9月生まれ。大連で敗戦を迎えたのは13歳、もうすぐ14歳になる頃だった。嵐子は1925年7月生まれ、ほぼ6歳ほど年下である。彼女はこの著作を書くために、当時大連にいた多くの人々取材した。男たちの多くは取材に応じてくれたが、女性たちは取材を拒否する人が多かった。大連でのことは話すのも嫌だったのだ。富永に聞けば、その筆頭が藤沢嵐子だったと言う。

それでも電話口に出た嵐子は、富永孝子の母親がロシア料理が得意で、ロシア人将校たちが集うレストランで料理を教えたこともあると話すと、やっと口を開き話し出した。

「なんて名のダンスホールか忘れましたが、正午から四時まで歌えばよいというので引き受けました。ドレスもなく、大急ぎで母の着物をほどき、手縫いのブラウスで舞台に立ちました。でも、あの時代って私、思い出すのも嫌ですね」(『大連・空白の六百日』)。

かつて旧満洲関係のシンポジウムに参加した時、パネリストだった作家のなかにし礼（牡丹江出身）や毎日新聞記者だった故・岩見隆夫（大連出身）ら男たちは、嬉々として敗戦後の大陸での生活を語った。少年だった彼らは、家族のために街に出ているんなものを売り、家計の足しに役立った。少年たちは生き生きとして動き回っていた。

しかし少女たちは違った。進駐してきたソ連兵は暴虐の限りを尽くした。日本人の家に押し入り、目ぼしいものを略奪する。女たちはソ連兵が来るとわかると、すぐに押入れに隠れたり屋根裏に潜んで彼らが出て行くのをじっと耳をすまして聞いていた。ソ連兵に辱しめを受けた女性たちもいただろう。自分がそのような目に遭わなくとも、そんな光景を見せられたり、聞いたことがあるだろう。



富永孝子は私に言うのだった。「私より4つ5つ上の女性たち、お嬢さんで育った人たちは大変だったと思います」。前述のように富永は敗戦時、満14歳になる少し前、まだ少女といえど少女である。しかし嵐子は20歳、もう女である。

嵐子も怖い目にあっただけかもしれない。直接被害に遭わずとも、聞くに堪えないようなことをたくさん見聞きしたはずである。彼女が「もう大連のことは思い出すのも嫌だ」と言うのは痛いようにわかる。

## タンゴは過去を背負っている

周知のようにタンゴの歌詞はほとんどがハッピーエンドで終わらない。その多くは愛する女に裏切られたり、悲惨な目にあったり、苦勞した男の話が多い。まさに人生のドラマを詠っている。今や伝説的タンゴダンサーとも呼ばれるカルロス・ガビートは私に「タンゴは人生を背負っている。追憶でできている」（『ダンスファン』2003年1月号）と語ったが、まさにタンゴは「過去を背負っている」のだ。

年を重ねるごとに、嵐子のタンゴはますます、人々の胸に迫ってくるように聞こえる。まさに「人生を歌っている」と言っていっただろう。

河内敏昭に聞けば、嵐子は未練らしいことは本当に言わなかったという。歌手を引退し、タンゴの世界から離れ、新潟県の長岡市に移り住んだが、タンゴ関係者に会おうとしなかった。例外的に会うことはあったようだが、これまで付き合っていた人たちとはきれいさっぱり交際を絶ったという。未練もなく実にさっぱりとした潔さだったようである。過去に執着しないさばさばした性格なども、何もかも一切捨てて中国大陸から帰国した引揚者たちに共通するように思えるのだ。そんなふうを考えるのは私の偏見だろうか。



## 二つの大地（日本と大連）に引き裂かれた嵐子

タンゴはイタリアやスペイン、東欧のユダヤの移民たちが創り上げた歌であり音楽である。嵐子も広い意味で「満洲」に渡った「移民」の末裔とも言えるだろう。映画作家の羽田澄子や山田洋次らにとっては、旅順や大連が「故郷」と呼べるような位置を占めている。しかし嵐子にとって大連は「故郷」とは呼べない。

どっちつかずの大連。思い出すのも嫌だという大陸での思い。過去を葬りたい、封印したいという思いは、芸術家であればこそ、精神分析的な意味でどこかで《昇華》しなければいけない。そうしなければどう生きていけばいいのだろうか。

嵐子の最初の著作である『タンゴの異邦人』を読むと、ロシータ・キログに触れてこんな文章が出てくる。アルゼンチンでビクターレコードの支配人が招待してくれた別荘でのアサードの時である。

「私が前からぜひ会ってみたいと望んでいた、その昔の名歌手ロシータ・キログを招待しておいてくれた。この時、キログ女史は、自分でギターを弾いて歌ってくれた。けれど自分はもう歌には何の興味もない。タンゴ歌手であった過去を思い出したくもない、と言っていた」

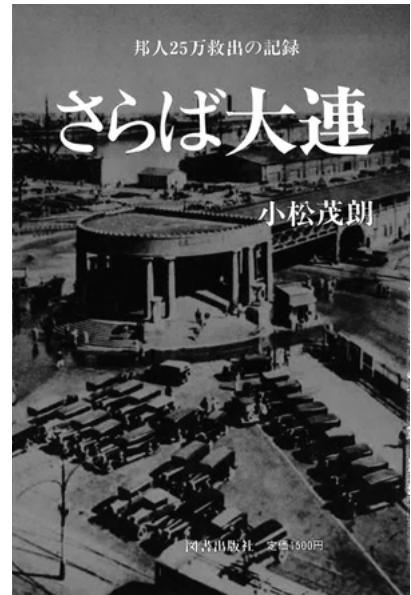
まるで晩年の自分のことを語っているように思えないだろうか。

## タンゴに過去の思いを込めた嵐子

嵐子はタンゴ歌手である。タンゴ歌手とはただ歌詞を唄うだけでない。感情を込めて歌わなければ聴く人を感動の渦に引き込むことはできないだろう。嵐子は日本のファンだけでなく、ブエノスアイレスの人々をも虜にしたという。それこそ決して語らなかった大連での人生、心の内に封印した思い、その痛いような想いをタンゴに昇華したと言えるのではないだろうか。

語りたくない大連、嫌な大陸での思い出。しかし、それに繋がる心の底に眠る無意識の思いまで封印することはできない。嵐子はその思いを封印できずにいた。心の奥底に眠る大連での諸々の思い、語りたくない過去、思い出したくもない心模様、しかしだからこそ、タンゴを歌う感情の中に、それを昇華し表現にまで高めることができたのではないか。嵐子のタンゴに我々が魅せられるのも、まさにここにある、と思うのである。

（文中、敬称略）



（1988年10月刊）

# María de la Fuente を偲んで

飯塚 久夫

あれは2005年の夏、ブエノスアイレスでのことであった。アルゼンチン国立タンゴアカデミーのガブリエル・ソリア副会長が、ちょっとビックリする人に会わせるから“カフェ・トルトーニ”に出てこないかという。“トルトーニ”は、あの詩人アルフォンシーナ・ストルニや画家キンケラ・マルティンたちも通った1858年創設のブエノスアイレスで最も古いカフェである。約束の時間に行ってみると、ソリア副会長の他に友人のセシリア・オリージョ女史、そしてさらに老婆といっても失礼ではないほど十分に歳とった、しかし威厳のある女性がいた。ソリア曰く、マリア・デ・ラ・フエンテさんだという。“マリア・デ・ラ・フエンテ”…一瞬、耳を疑った。というより『聞き慣れた名前だけど、誰だったかな?』、数秒の沈黙の後『そうだ!…1954年にファン・カナロ楽団と一緒に来日した人だ!!』と思い出し、椅子から飛び上がるほど驚きを覚えた。まさかそんな人に会えるなんて…

口を開いたマリアさんは、まさに威風堂々、しかし実に優しい人であった。1917年4月25日生まれ（18年説もある）であるから、その時、88歳。余りの驚きと緊張で話しが弾んだとはいいい難いが、朝食時だったので“メディア・ルナ”を食べないかと言う。恥ずかしながらその時は“メディア・ルナ”というスペイン語を知らなかった。“半月”だからクロワッサンのことをそういうのだと分かり易く教えてくれた。しばらくして“トルトーニ”を出て二階に行こうという。その二階には国立タンゴアカデミーのオフィスと博物館がある。これまた感動と驚嘆の連続の博物館であったが、案内しながらマリアさんが「ロカ」



「ラ・クンパルシータ」など来日時に歌ったという（如何せん当時6歳の筆者は来日公演を聴いていない）曲を歌ってくれた。88歳故、音域こそ低くなっているが、音程、リズムまったく狂いのない素晴らしい演唱であった。絶え間なき感銘の時間が過ぎ、ソリア副会長が次の場所へ行こうという。次の場所というのが、また驚き…あの方アン・マグリオ“パチョ”楽団でトップ・バンドネオンを弾いていたガブリエル・クラウシの自宅だという。タクシーに乗り、マリアさんの自宅近くまで送りながら行くことにし



左端が著者、まん中がマリア・デ・ラ・フエンテ

た。タクシーの運転手が、客はマリア・デ・ラ・フエンテと日本人だと分かったと、藤沢嵐子の話しになり、運転手がタンゴを歌い出すという噂に違わぬ微笑ましいこともあった。

2010年、ソリア副会長の努力により、何とこのマリア・デ・ラ・フエンテの新吹き込みCDが発売されることになった。伴奏はワルテル・リオスのバンドネオン。93歳の歌声はバンドネオンとともにまさしく歌と音楽がひとつに融合する感動的なものとなった。「チェ・バンドネオン」「最後のバンドネオン」「フィモス」などのレパートリーであるが、とりわけ「Cuando Miran Tus Ojosあなたの瞳をみつめるとき」は時空を超えた感動を与える名唱である。このCDは日本タンゴ・アカデミーからもファン・カルロス・ゴドイ、エルサ・リバスの盤と共に3枚組200部限定で頒布されたところである。

マリア・デ・ラ・フエンテのデビューは1935年、エドゥアルド・フェリ楽団、“ラジオ・エル・ムンド”でのことであった。その後フリオ・デ・カロ楽団でも歌い、1943年にはエクトル・マリア・アルトーラ楽団で“ラジオ・ベルグラノ”、50年代にはフランシスコ・マラフィオッティ楽団で“ラジオ・スプレンドイ”でも活躍した。

初録音は1946年、オデオン・レコードでアメリカ・ベジョートの伴奏、曲目は「パードレ・ヌエストロ」「エン・カルネ・プロピア」などであった。1950～52年にはアストル・ピアソラ伴奏でテーカー・レコードに録音を残しており、その中の「フヒティバ」と上記「エン・カルネ・プロピア」はインターネットの“TODO TANGO”のサイトで聴くことも出来る。1957年にはフランシスコ・ロトゥンドの伴奏でも録音している。

しかし、マリアは60歳頃から約20年間、声が出難くなり、歌うのを止めていた。彼女の強固な意志のもと、リハビリテーションに見事に成功し、80歳の時にはネストル・マルコーニ、リト・ネビアらの伴奏でメロペア・レコードに復帰した。この意志の強さ、“歌”を歌うということへの情熱にかけては並々ならぬものがあり、90歳を超えてからも見事な現役として活躍を続けた。本場からの初来日歌手という想いから日本への愛着も強い人であったが、惜しくも2013年11月3日、96歳の生涯を閉じた。

# ネリー・オマールさんを偲んで



高場 将美 

ネリー・オマールさんが102才で亡くなった。2013年12月20日、ベッドで眠っているあいだに、安らかに死をむかえたとのこと。(以下では、彼女の名前は「ネリ」と——実際の発音に近く——表記させていただきたい。慣習に反しますが、ごめんなさい)

Nelly Omar というのは芸名で、本名はニルダ・エルビーラ・バトゥオーネ Nilda Elvira Battuone——父はジェノヴァ (イタリア) からの移民で、農牧場の働き手たちの親方をしていた。これは地位が高く、収入も大きい仕事である。ネリさんが生まれたのは、ブエノスアイレス州グワミニー郡ポニファーシオ——首都の南西約600キロの大草原地帯。1911年9月10日が誕生日。

父はギターを弾きながらフォルクローレ (このことばは当時は使われていなかったが) を歌うのが趣味だった。イタリア移民は、タンゴばかりでなくフォルクローレでも、作る人・育てる人の重要な一部だったのだ。この父は、ブエノスアイレスへ上京の機会には競馬場へ行き、そこで、後にタンゴの歌の創造者となる、当時はフォルクローレの歌手カルロス・ガルデル Carlos Gardel と知り合った。そして、ガルデル＝ラサーノの2重唱の公演を、地元のグワミニー町で主催した。その打ち上げパーティで、7才のネリさんは、ガルデルが歌う姿を生で見て、この上ない感動を受け、そのときから彼はネリさんの崇拜する偶像になった。

父親が歌好きだったので、ネリさんがアーティストになるのを助けたのだろう、ということ、わたしは先ごろ『ラティーナ』誌の追悼記事に書いた。でも、事實は、そんなに甘いものではなかった……いま真相がわかったので、お伝えします。

ネリさんの一家の経済状態は良かったので、彼女は良家の子女の行くような学校に入り、舞台芸術や歌の勉強もしていた。でも、彼女が12才のとき、父親は亡くなり、ネリさんの言によれば「財産を弁護士に食べられて」貧困家庭になってしまった。

仕事を求めて、一家は首都ブエノスアイレスに引っ越し、13才のときから、ネリさんは靴下づくりの女工さんになって家計を助けた。その給金は微々たるもので、彼女はプロのアーティストも兼業することになった。全国的なラジオ・バラエティ番組 (歌と短いコメディ) 「焚き火の灰 Cenizas de Fogón」の一座に入った。

その後も、ラジオで活動し、成人後は (1932年から) 姉との2重唱でフォルクローレを、ネリさんのソロでタンゴを歌い、各局に出演した。35年にマネージャーと結婚したが、2ヶ月で別居。でも、離婚はしなかった。

38年に「スカートをはいたガルデル」というキャッチフレーズが付けられた。わたしは、こ





映画で歌うネリさん。ガルデールそっくりの口の開けかた！（1941年）

んな品性のない、差別意識まるだしの文句には嫌悪感を覚える。タンゴはマジョ主義の音楽であり、そういう時代だった（今でも？）から仕方がないのだけれど。

ただし、彼女がガルデールから巨大な影響を受けていることは疑いが無い。ほんとうにいい歌には、男性も女性もない。

ネリ・オマールさんは、ほんの少し映画にも出た。

1940年、『愛の歌声 Canto de amor』は、二枚目歌手（大スターとまで行かないが）カルロス・ビバーン Carlos Viván が主演で、その相手役だった。内容はまったくわからないけれど、平凡な映画だったことはたしかだ。

41年、音楽映画『アメリカ大陸のメロディ Melodía de América』に出演。題名からは、オール・スター・キャストを思わせるが、キューバの大アーティスト、ボラ・デ・ニエベ Bola de Nieve 以外に、わたしの知っている有名歌手の名前は出演者資料にない。ネリさんは、作詞 J・ゴンサーレス・カステイージョ José González Castillo、作曲カトゥロ・カステイージョ Cátulo Castillo の『にわか雨 El aguacero』を、みごとに、まるでガルデールが歌っているみたいに完璧に表現している（ほめすぎ？ ハハハ）。この曲の初演だと思われる。（インターネットで見ることができます。<http://youtu.be/cR-StPRGsP4>）

51年にアルゼンチン＝メキシコ合作映画で、歌声の吹き替えをしているが、クレジットにも出ていなかったようで、詳細はわからない。

彼女に限らず、世界的に、いい歌手は（ごく少数の例外を除き）映画出演は好きでなかった時代だ。ネリさんは、「売込みをするのは恥辱」と思う、気位の高いアーティストだったので、細々と（笑い）ラジオ出演を主に活動していた。

そして、あるラジオ局で、1937年に、台本作家もしていた詩人・タンゴ作詞家のオメーロ・マンシ Homero Manzi (1907-51) と知り合った。オメーロとネリさんは強くひかれ合った（とくにオメーロのほうが）。最後には、オメーロは、別居中のネリさんの家に来た（らしい）。ネリさんの言うところでは――

「ある日わたしは彼に言いました。『お願いだから、やめてください。わたしは結婚している女です。わたしをかまわないで』——言わなければよかった。かえって悪くなりました。わたしにたくさん手紙を書いてきました。わたしが離婚すれば、彼も離婚すると約束しました。……迫害そのものでした。彼はあらゆる場所に現われました。『お願いです、わたしに息をさせて』と、わたしは彼に言ったものです。彼はほんとうに恋に落ちていました、でも礼儀正しかった。でも、彼の奥さんは離婚手続き中に鎮痛剤を1瓶飲んで自殺を図ったので、彼は家に帰らなければならなくなりました。また戻ってきたとき、わたしは彼に扉を閉ざしました。あれは、決してかなわぬ愛だったんです」

オメーロが1941年に発表したタンゴ『マレーナ』（作曲デマーレ Lucio Demare）は、彼がブラジルで、マレーナ・トレードという無名の女性タンゴ歌手の歌を聴きながら、ネリ・オマールの声を思い出して書いたのだという——「彼女はバンドネオンの声を持っている……」。ほかに、『ニンゲーナ』（42年、作曲フェルナンデス・シーロ Raúl Fernández Siro）、『ただ彼女だけ

Solamente ella』(44年、作曲デマーレ Lucio Demare)、  
『スール(南) Sur』(48年、作曲トロイロ Aníbal Troilo)  
にうたわれている女性は、みんなネリさんだそうだ。彼女  
自身がそう言っているのだから、確かな情報である。

詩・歌詞はフィクションの世界であり、マンシの他の恋  
愛体験もインスピレーションの一部になっているだろうけ  
れど、オメーロが愛した、あるいは恋したすべての女性の  
集約された究極のひとがネリさんだったのだ。

オメーロは、やがてガンで、かなり長い苦痛の時を経て  
なくなった。ネリさんは、家族がいないとき、ただ1度病床のオメーロに会うことができたそうだ。

さて、ネリさんは、1946年に、初めてレコーディング。フランシスコ・カナール Francisco  
Canaro楽団の伴奏で、当時の大ヒット曲『さらば草原 Adiós Pampa mía』ほかを録音している。  
カナールの旧作に、オメーロが新しく歌詞を書き直した『下町の気高さ Nobleza de arrabal』が、  
わたしは好きだ。ブエノスアイレスの場末が、大草原の一角だった時代の空気——ネリさんなら  
ではの味わいが素敵だ。

1951年に、ソロ歌手として、ロベルト・グレーラ Roberto Grella (ギター) のグループの伴奏  
で、おもにフォルクローレに分類されるレパートリーを録音した。そのうちの2曲『パパはお嫌  
い Tata no quiere』と『ラ・ボジェーラ(牛追い娘) La boyera』は、後に、東芝からEP盤で  
発売され、これが、日本のタンゴ・ファンに、ネリ・オマールの名前と声が知られた最初である。

この2曲は、わたしも50年少し前に、タンゴ喫茶《ミロンガ》で時たま流れるのが楽しみだっ  
た。とくに、夕暮れに家路をたどる娘が、牛たちに愛情こめて名前を呼びかける「¡Priental...  
¡Mochol... ¡Parecidol...」というところが、とっても魅力的だった。『牛追い娘』の楽譜は、どうい  
うわけか、日本で発売されたタンゴ名曲集に収録されていて、わたしは古本屋で買い、ギターで  
弾いてみた……。

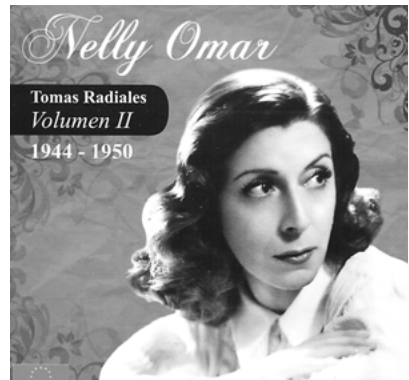
ネリさんは、ペロン大統領夫人エバの信奉者だった。1955年にペロン政権が倒れると、活動の  
場を奪われてしまった(ペロン独裁時代にも大活躍なんかしてないのに)。

友だちの女優歌手ティタ・メレーロ Tita Merello さんの助力で、ウルグアイで少し活動がで  
きた、そしてベネズエラに、1年間ほど住んでいた。やがて帰国したけれど、もう歌う意欲はな  
くしていた。精神的に打ちのめされた状態が長くつづいたようだ。

だいぶ後に、ベネズエラで知り合った(やはりペロン党だった)ギタリスト、ホセ・カネー  
José Canet (1915-84) (彼もペロン党だったらしい) が、ネリさんが歌わないでいるのは、とん  
でもない損失だと、嫌がる彼女を説得して、カムバック・再出発させた。

1972年7月から、ネリさんの新しい芸歴が始まる。ライブで、そしてレコーディング。メジャー・  
レーベルではタンゴのレコードなんか出せない時代になっていたから、自費出版のようなマイ  
ナー・レーベルでの発売だったけれど、そのほうが、時代に流されず、筋を通すネリさんにはふ  
さわしかった。そして、LPアルバムの時代だから、1枚のレコードに2曲だった昔とは比較に  
ならない、たくさんの曲が録音された。

日本だけではなく、世界的に、アルゼンチン-ウルグアイでも「タンゴといえばオルケスタ・





ティピカでなくては」というファンが大多数だが、ネリさんは（経費の面での考慮も、もちろんあるだろうが）ギターといっしょにうたうことに徹底した。昔も彼女は、歌手を枠にはめて制約するオルケスタ・ティピカとの共演はほとんどないはずだ。

レパートリーにも、いわゆるタンゴ楽団での定番はほとんどなかった（そういうものも、きちんと歌えたが）。古典の有名な器楽曲に歌詞をつけたものなど、意外な選曲で、「さすが!」と思わされた。わたしは、ワルツの名曲が、次々と録音されるのがうれしかった。

81年にカネーは、半身不随で演奏活動をやめた。ネリさんは、他のギター・グループをしたがえて、いつまでも歌いつづけた。美声だった若いころよりも、はるかに多くのファンを獲得し、タンゴの世界の最高のスターのひとりになったといっても過言ではないだろう。タンゴ・ファンの高齢化は世界的現象（?）だから、ネリさんは今日のタンゴ・ファンのアイドルになったといえるだろう。

高齢のため、歌う声をなくしたネリさんは、語っているだけでも、力強く、しっかりと曲を表現していた。歌になっていないのに、ちゃんとメロディが聞こえるのが、DVDで見ているわたしは奇跡だと感じた。

この最後の時期のネリさんについては、日本人のファンでブエノスアイレスでお聴きになった方も多し、CDやDVDでの情報もたくさん入ってきたので、ここでは書かない。百才記念のコンサートが最後のステージだったろうと思う。

再出発後のネリさんは、作詞をはじめ、ホセ・カネーが作曲して、いくつかの曲が発表された。その中で、彼女自身がいちばん気に入っていたらしく、またファンのみんなも大好きな曲をご紹介します、彼女を偲びたい。

タイトルは『愛して、そして口には出さないで Amar y callar』。

Eternamente mi vida te dejo, / eternamente mi vida te doy / y aunque tú dices que nunca me atrevo, / eternamente mi vida te doy. //

Como las olas que besan las playas, / como la brisa que besa la flor, / siempre estaré dondequiera que vayas / para adorarte y calmar tu dolor. //

Y si es que alguno curioso te llama / para saber si me quieres a mí, / di con la boca que no, que no me amas, / pero con tu alma repite que sí, / pero con tu alma repite que sí.

永遠にわたしは命をあなたのところに置く。永遠にわたしは命をあなたに上げる。あなたはわたしのことを、決して大胆なことをしないと仰うけれど、永遠にわたしは命をあなたに上げる。

浜辺にキスする波たちのように、花にキスするそよ風のように、

いつもわたしは あなたの行くところ、どこにもいるだろう、あなたを崇拜し、あなたの痛みをやわらげるために。そしてもしだれかが 好奇心にかられてあなたを呼んで、わたしを愛しているか知ろうとしたら、口ではノーと言いなさい、わたしを愛していないと。でもあなたの魂はシーと繰り返しなさい。

# ぼくの神田・神保町、ミロンガ

池田 博充（北区）

『東京でいちばん行きたいところは？ときかれたなら、ぼくは言下に「神田・神保町」というだろう。では東京でどこが最も東京らしい場所か、と尋ねられたら——ぼくは、やはり、即座に「神田・神保町」と答える』

冒頭から引用文で恐縮だが、これは、今年一月に他界された森本哲郎著「ぼくの東京夢華録」の一節「神保町の書舗」の冒頭のところである。タンゴ喫茶「ミロンガ」の斜め前に富山房があって、そのショーウィンドウで紹介されコピーも置かれていたから、ご存知の方が多いかも知れない。その富山房も今はドラッグストアに変わってしまった。

森本哲郎さんが神田・神保町を東京でいちばん行きたい最も東京らしいところと誇らしげに言うのはそこが世界一本屋街だからであって「ミロンガ」のある街だから、では、むろん、ない。私にとっての神田・神保町は、そこで本屋めぐりをして、新刊本のインキや古本の紙魚の臭いに親しむのもそれなりに愉しいが、さらに、その中学校へ通学し、終生の友人が出来た街、そして何よりも「ミロンガ」があってアルゼンチンタンゴに熱中したところ、私なりの青春が詰ったこの上なく懐かしく、愛着のある街である。

タンゴにある程度関心を持ったのは、ファン・カナロの来日を新聞で知りながら行けなかった記憶があるから、1954年頃、中学から高校生にかけての頃だと思う。親にねだって近所の電気屋のお兄さんに組立ててもらった電蓄で、クラシックのポピュラー名曲やタンゴとSP、EP、LPでくり返し聴く程度であった。フィルポの「夜明け」だのダリエソの「フェリシア」を愛聴したが、カスティリアンズのクンパルシータ、ジューン・バリの「ストレンジ・センセーション」、カナロの「エル・チョコクロ」やルイ・アムストロングの「キス・オブ・ファイア」など「タンゴも聴くよ！」という程度だったのであろう。

中学時代の旧友に連れられてタンゴとコーヒーの店「ミロンガ」を知ったのは高校生の頃、昭





和31年のことである。当時は、タンゴにしるクラシック音楽にしる、自宅で装置を揃え、SPやLPを入手して聴くことは望めず、音楽喫茶へ通ってコーヒーをすすりながら鑑賞するというのが一般的であったと思う。「ミロンガ」はSP、LP、テープを併用してリクエストにもキメ細かく応じてくれた。更には大岩さん、島崎さんの解説によるテープコンサートの時間も設けられていた。「ミロンガ」の前後のすずらん通り、靖国通りは中学校への通学路であったのに、路一本入った路地裏の通りにこんな店があるとは夢にも思わなかった。

それからは私にとってミロンガがタンゴの聖地になった。本屋をひとめぐりして、入手した本を小脇に抱えてミロンガに入りウィンナーコーヒーを味わいながら聴こえてくるポルテニア音楽に陶然としたものだ。ダリエソのミロンガ、フランチャーニ=ポンティエル、デ・アンジェリスなど、歯切れが良くてリズムが踊るようなタンゴももちろん聴ける機会は多かった。カスティージョのカンドンベ、ユパンキのfolkloreも目先が変わってなかなか良いと思った。

ディ・サルリの古い録音の「カスカベリート」「ラ・トルカシータ」のセンチミエントにひかれ、テープ録音の「エル・チョコクロ」のバンドネオンのバリエーションにしばれた。何故かこの曲のテープはピッチが速く録音されていて、後に出たLPで聴くと間延びしたように聞こえたものだ。プグリーセでは「マラ・フンタ」、「エネ・エネ」のルジェロに息が詰まり、「レクエルド」は私の最愛の曲の一つになった。歌は、たとえば、ティト・スキーパの「ラ・クンパルシータ」の朗々たる名唱に、この歌い手は男か女か尋ねて呆れられたことがあった。それほど私の耳は悪かったのだ。

タンゴ好きが昂じて、ミロンガに入り浸るようになると、街を歩いても「ダンス教室」の看板が「タンゴ」に見え、「アンデルセン」を「アルゼンチン」と早とちりしたりして苦笑いしたこともある。何をやっても思うようにゆかず滅入っている時「センチミエント・マレーボ」「フマンド・エスペロ」のキローガはひとときわ身に沁みだし、マガルディの「ディオス・テ・サルベ、ミ・イーホ」、「バガブンド」の泣き節に心中はほとんど共に嗚咽していた。落ちこぼれていく、墜ちてゆく感覚に寄り添ってくれるような気さえた。タンゴという音楽の持つ魔力のせいかも知れない。



世はステレオ時代になり、ミロンガも再生装置をステレオ化する際、ママさんから不要となったスピーカーのエンクロージャーをいただけると聞いたときは天にも昇る思いがした。早速、友人に手伝ってもらってトヨエースをチャーターして、やっとの思いで自宅の二階に運びこんだ。エンクロージャーは巾110cm、高さ133cm、奥行73cmもあって、今や神格化されている英国タンノイ・オートグラフと大きさ・形が類似しているから、店主はオートグラフをイメージして大工さんに造らせたものと思う。2cm厚の桜の木に濃いニスを塗ってある。ミロンガではこの密閉型エンクロージャーに英国グッドマンの12吋ダブ

ルコーン型スピーカーを組みこんで鳴らしていた訳だ。

これと同じスピーカーを、所有していた地方のオーディオファンから、私の使用していたナショナルの8吋プラス2万円で譲り受けることが出来た。50年代末の2万円といえば、多分大卒初任給の2倍近かったから、当時学生だった私には大金であった。そんな思いをして入手したスピーカーをエンクロージャーに組みこんで、恐る恐る音出しをして見ると、バンドネオンの渋く重い響きが、アコーディオンの明るい軽々しさと対照的に表現される。トレス・ギタルラス・アルヘンティーナスの「オルガニート・デ・ラ・タルデ」を聴くと、これは、まぎれもなく50年代、モノラル時代のミロンガで何回となく聴き惚れたあの音色である。アコースティック・ギターの倍音を含んだ中高音の輝き、自然で地味ななかにも、派手なところが滲む。高山正彦さんの造語で「地味派手」という形容語がこのグッドマンのアクシオム300の音にピッタリ合うと思った。当時のポルテニア音楽のレコードを聴くには最良のスピーカーではないかと思っている。エンクロージャーには、タンゴファンがこのキャビネットに頭を傾けて聴き惚れた、その頭の油、整髪料の跡がはっきり大きく残っていて、これもまた私にとっては格別に大切に思える。タンゴファンの種々な想い、歓び、哀しみ、情熱がキャビネットに浸みこみ、それが音として出てくる気がする、と言ったら思い込みが過ぎるだろうか。何しろ部屋が狭いのに大きいキャビなので窮屈なのだが、音と共に過去を運んでくれるから今でも聴ける状態にしてある。私の唯一といって良い宝物である。

タンゴとどう向き合うにせよ、生活のために定収入を求めて仕事につかざるを得ず、そこでの仕事に追いまくられるようになると、神田神保町、ミロンガのタンゴに接する機会はめっきり減ってしまった。それでも本屋廻りの後に、友人との待ち合わせのために、あるいは仕事中のちょっとした合間を見てミロンガに足を運んだものだ。閉店のサインの「アディオス・ムチャーチョス」をいったい何回聴いたことだろう。もっとも何十回聴いてもあの曲、演奏共に好きになれなかったが。10時を回っても物足りない（飲み足りない）思いの残るときは、前の姉妹店「ラドリオ」にハシゴした。ここは古いシャンソンやコンチネンタルタンゴが流れる店で、私にとってはミロンガと共にまさにセピア色の昭和である。

再生装置とソフトが安く手軽に入手可能になり家庭で音楽を愉しめるようになって「音楽喫茶」に通う必要性は薄れてしまった。かつてのミロンガは「ミロンガ・ヌオーバ」として盛業中である。アルゼンチンタンゴを「聴かせる」から「聴こえる」、昭和レトロな神田・神保町の路地裏のカフェになった。ミロンガ「ヌオーバ」たる由縁だろう。スピーカーはアルテックでLPレコードを聴かせてくれる。店内も当時の面影をほぼそのまま残しているので本屋を覗いた際に時折立ち寄ってみるがやはり限りなく懐かしい想いにかられる。

今は再生装置によって、自宅で過去の名演奏を好きな時に再現できる、という昔では例え王侯貴族でも叶わなかった贅沢が可能になっている。しかし、当たり前のことだが、そこから聞こえてくる再生音は楽器そのものの「生」の音、いわゆるアコースティック音とはやはり違う。ここに「生」の演奏を、安くない料金を払って、聴きに行く主な動機がある、少なくとも私には。ところが、それにも拘わらず、マイクや増幅装置がやたら大活躍してスピーカーからバカデカイ音

響があふれ、求めている楽器の「素の、生の」音が聞こえてこないことが多々ある。スピーカーの前の座席を避けるなど努めてはいるが限界もある。「PA」パブリック・アドレスという職種が存在感を出し過ぎているように思えることが多い。私にはマイクを通した音よりも楽器から媒介物なしに直接聞こえてくるアコースティック音の方が断然心地良く聞こえる。特にバイオリン等弦楽器、バンドネオンはマイクを通さないで聴きたい。

クラシック界ではマイクは無縁だが、タンゴを含めポピュラー音楽ではマイクを使用するのが通例になっている様だ。もう一度原点にもどって、楽器の音をそのまま聴衆に届け、聴く者は「生」の音の美しさ、心地良さを存分に味わうことを原則として、マイクの使用は必要最小限にとどめ、止むを得ざる場合に限る、ということになって欲しいと思うのだが如何だろうか。

この点に関してジャズオーディオの菅原正二氏の発言がある。「“生”で聴くジャズに以前ほど興奮しなくなった。その原因について—中略—考えてみた。」「まずPAが発達(?)し過ぎて“生演奏”なのに“生の音”がほとんど聴こえず、有難みがなくなった。と同時にマイクロフォンの数が多すぎて、枝葉の音ばかりが目立ち、大木の幹が細くなり、森、すなわちハーモニーが失われ」「会場にはジャズの大ベテランの方が多数いらしているにも拘わらず」「一等席に陣取った巨大ミキシングコンソールを終始いじくりまわしている一人のエンジニアにその会場の音楽を完全掌握されていていいものかどうか。次にそれを許すミュージシャンもミュージシャンであると思う。ちなみに、ステージから降りて会場を動きまわって、そのサウンドの異常さを自分でチェックする良心のあるミュージシャンは、僕の知る限りごくわずかである。」「(「ステレオサウンド」184号「聴く鏡」)

今日の日本社会は拡声機騒音の洪水である。私の通学路でありミロンガへの通路であった御茶ノ水駅から駿河台下に下りてゆく大通りには楽器店が増えて拡声機を歩道に向けて競うようにボリュームを挙げている。楽器を売る店が騒音を撒き散らすとは、これは漫画ではないか。この通りは耳栓が欲しいほどうるさい通り道になってしまった。通行人は慣れてしまったのか平然として苦情を申し立てる様子もない。耐えられない程不快、苦痛に感じるのは少数派に過ぎないのかも知れない。マイクを使った大音量の電子音に慣れてしまって、何の違和感もない人々が多数派であるなら、私は正しく少数派ということになる。加工された音、拡大された電子音に囲まれた状況が変わって「素」の「生」の音、自然な音が溢れるようになるのは何時のことだろうか。

## ● 訃 報 ●

元「中南米音楽」社長中西義郎氏夫人の中西環恵さんが1月19日に亡くなられた。  
享年83歳。

ご冥福をお祈りします。

(編集部)

# 気楽なブエノス・アイレス一人旅

## 聴く楽しさ

佐藤 進（上尾市）

2014年1月30日から2月9日の間ブエノス・アイレスを訪問した。実質11日間という短い滞在期間にも拘らず「訪ねる＝タンゴに歌われた場所を訪ねる」、「聴く」、「再会する＝ブエノス・アイレスの友人に会う」、「探す＝タンゴの資料、CDを探す」、「踊る＝レッスンを取る、そして初めてミロンガで踊る」を短期間に実行しようという欲張りな計画を立てた。旅を終えた今振り返ってみると、14年振りのタンゴの故郷は期待通りの成果と充足感を与えてくれ、非常に満足している。今回の旅のメインとなる「聴く」については、滞在中に訪れた生演奏をしているライブハウス、タンゴ・ショー、ミロンガは8回であるが、以下に主な6回について述べたい。

### 1. Soledad Villamil＝ソレダー・ビジャミル（女優・歌手）

出演場所：Centro Cultural Torquato Tasso, San Telmo

人気のある女優である。女優として日本で知られるようになったのは、2010年に上映されたアルゼンチン映画「El Secreto De Sus Ojos＝瞳の奥の秘密」である。殺人事件に恋愛を組み合わせたよくできた映画であるが、主演女優を演じたのがソレダー・ビジャミルである。数年前よりタンゴをはじめ、フォルクローレ、カンシオンなどを歌い、既に3枚のアルバムをリリースしている。この女優の映画を観、その後彼女の歌う「La Canción y El Poema (Morir De Amor)」を聴いてから、すっかりファンになり、CDはすべて購入していた。そんな彼女がブエノス・アイレス滞在中にTorquato Tassoに出演すると知った時は、良いタイミングで訪亜の予定を組んでラッキーと喜んだ。

この晩は9時過ぎに正面の扉が開いて、入口近くのカウンターで入場料を支払うとすぐにテーブルに案内された。前から2列目のステージに近い席で4人分の椅子がある。そのテーブルには金髪の30代の女性がかけており相席となる。おそらく恋人でも待っているのだと想像し、軽く挨拶して着席する。店内を見たり、グッズの販売コーナーを覗いたりして15分ほど過ごした頃、ウェイターが注文を取りに来る。あまり食欲ないためビールだけ注文する。相席の女性とは見ると想像していた恋人の到着を待たずに、





ビール、オレンジジュースとピザを注文する。どうも一人で来ている様子であり、沈黙しているのも失礼なのでこの時話しかける。ビールの到着を待って乾杯し、訊き出したところではポーランド人、独身女性、会社勤め、休暇を取って南米旅行中とのこと。この後開演までの約1時間おしゃべりをしながら退屈もせずにご過ごした。こんなことも一人旅の楽しさであろう。店内は満席でほとんど地元の人々とみられ、観光客らしき客は散見される程度である。

予定時刻より約30分遅れの10時半頃に開演した。最初の曲は「Se Dice De Mí」である。少し気取った歌い方であるが、軽い歌いくちの現代版「私の噂」である。続いて「Vendrás Alguna Vez」、間にフォルクローレ2曲を挟んで次のタンゴはアスセナ・マイサニの「Pero Yo Sé」で、タンゴというよりも現代の歌曲的仕上げとなっている。そしてワルツの「Desde El Alma」と続く。原曲のワルツらしさを抑えた編曲ではあるが、曲の良さに助けられて面白い歌となっている。タンゴは以上の4曲のみで、残りはフォルクローレとカンシオンである。待望の曲はラスト前に歌われた。「La Canción y El Poema (Morir De Amor)」で、ウルグアイの吟遊詩人といわれた Alfredo Zitarrosa の名曲であり、私の大好きな曲である。ソレダー・ビジャミルの歌は原曲のしっとりとした感じから、現代スペイン・ポップス調に変えられているが、この軽めのポップス感が彼女の特徴となっている。トラディショナルなタンゴを好む愛好家からは見向きもされないかわからないが、ローカルの人々には非常に人気がある。この晩の歌の中で一番喝采が多かったのはこの曲であり、ファンとしては嬉しかった。ラスト曲とアンコール2曲は現代風フォルクローレでステージは終了した。伴奏はギター、エレキ・ベースとドラムスのトリオであった。歌は軽めのポップス調であるが、女優であるだけに表現力は豊かであり、トークも観客を惹きつけるものがあり、ステージのすぐ近くで歌う表情、しぐさなど見られたのは、大げさに言えばアルゼンチンまで来た甲斐があったというものである。

## 2. 演奏：Mission Tango (Trío)、歌：Fernando Rodas & Eugenia Bianco ダンス：Andrea Y Sebastián

出演場所：Sala Alfonsina Storni de Café Tortoni

由緒あるCafé Tortoniへタンゴの演奏の入場券を買いに行った。店内では午後のお茶や遅めの昼食をとる観光客らしき人達で満席である。演奏の行われるSala Alfonsina Storniの入口近くで土曜日の入場券を購入するが、入場券はペソで支払えば170ペソ、米ドル払いは50ドルと言われびっくりする。ペソを持っていない観光客からぼる商法だろうか。当日の公定換算レートでは



US50ドルは400ペソに相当するし、闇レートだと600ペソになる。どんな計算なのか疑問を感じる。

演奏のある晩は開演1時間前に到着し、アルゼンチンの南部から来たローカルの観光客と相席となる。会場内はほとんどが欧米の観光客とみられる。入場してからしばらく飲み物を飲んだりして過ごすうちに、ほぼ定刻の8時半に演奏が始まる。「El Amanecer」でスタートする

が、トリオの演奏は小気味よい。続いて「Felicia」とインストで2曲演奏される。男性司会者が登場しユーモアを交えながら次の曲と男性歌手を紹介する。男性歌手Fernando Rodasは「Barrio De Tango」を歌う。続いて女性歌手Eugenia Biancoが登場し「Melodía De Arrabal」を歌う。二人の歌手とも声量もあり聴いていて心地よい。ここでAndrea y Sebastiánによるダンスであるが、ワルツ「Desde El Alma」を狭いステージでちょっと窮屈そうに踊る。混んでいるミロンガでの踊りを連想させる。途中5分ほどの休憩をはさんで、前半8曲、後半8曲がインスト、歌、踊りで演じられる。「Milonga De Mis Amores」「Inspiración」「Chiqué」「Nostalgias」がインストで、歌では「Por Una Cabeza」「Uno」「El Día Que Me Quieras」「Volver」、踊りは「Quejas De Bandoneón」「La Cumparsita」が演奏された。アンコールは出演者全員による「La Cumparsita」が繰り返された。Mission TangoはJorge Rattoni=ピアノ、Tito Farias=バンドネオン、Hugo Romes=ギターのトリオであり、現在はCafé Tortoniの専属のような形で出演している。60-70代のベテラン奏者達であり、息のあった3人組は若干のインプロビゼーションを入れながら客席を喜ばせていた。バイオリンの無いのが残念であるが、結構楽しめたステージであった。バンドネオン奏者のTito Fariasはノルベルト・ラモス楽団員として来日している。

### 3. Noelia Moncada=ノエリア・モンカーダ（歌手）

出演場所：Café Vinilo, Palermo

2度の来日により日本のタンゴ・ファンにお馴染みのノエリア・モンカーダが、Café Viniloに出演することを知り、ブエノス・アイレス在住の後輩と共に聴きに行った。席に案内されて暫くした後、ビールとピザを注文し（これが後でいつもの悪い癖のもととなる）談笑しているうちに、ようやく10時近くになって開演となった。伴奏はCafé Viniloの専属と言ってよいOrquesta Victoriaである。「Marioneta」に始まり「La Última Grela」「Mensaje」「Garúa」と、トークを交えつつ歌は進む。難しそうな歌が続くが、目の前のノエリアは気負いもなく適度な感情表現を見せながら、伸びやかに歌ってゆく。客席には応援団と思われる若い女性が散見され、時たま発せられるファンからの声援が、ライブハウスの雰囲気盛り上げている。「Oro Y Plata」「El Motivo」「Che Bandoneón」「Volvió Una Noche」「La Noche Que Te Fuiste」など10数曲が歌われた。よく知られている曲が多いが、上手な歌手が歌う現代風タンゴという印象である。「Oro Y Plata」は記憶に残る歌であった。当夜の観客のほとんどは地元の人とみられ、若い女性が多かったのは若干の驚きである。

歌が終演に近づいたころ心臓の鼓動が速くなり気持ちが悪くなり出した。額には汗がにじみ出し、椅子にしっかりと座ってられない。ビールをグラスに2杯ほど飲んだだけなのに、吐き気までしてきた。常日頃からの低血圧で酒に弱いところへ、連日の夜更かしと時差で睡眠不足、さらに旅の疲れも溜まり、少しのアルコールですっかり酔ってしまったようだ。こんな時に立ち上がると一瞬意識を失い転倒することは今までも何度となく経験しているので、じっと椅子にかけ回復を待つ。残念ながらステージの最後の部分は、歌を聴いているどころではなく、ほとんど記憶にない。アンコールが終わり大きな拍手で終演となるころ、少し気分が回復してきた。Café Viniloからホテルまでは連れに送ってもらい無事帰りついた。44年前アルゼンチンで車から降りたとたん倒れて顎を7針縫った記憶が蘇り、今日は倒れることなく済んでよかったと

ほっとしながら眠りについた。

## 4. Orquesta Victoria

出演場所：Café Vinilo, Palermo

Café Viniloは2009年にオープンした現在のブエノス・アイレスでは最もホットな「いい音楽が聴けるライブハウス」として知られている。店は100席余のこじんまりとしたライブハウスで、お洒落地区といわれるパレルモの住宅地にある。毎週月曜日はOrquesta Victoriaのタンゴ演奏とミロンガで、その他の日はいろいろなジャンルのミュージシャンが生演奏している。

この夜はOrquesta Victoriaの演奏が聴けるので、前の晩に続きCafé Viniloへやって来た。ミロンガの晩ということでテーブルをフロアの周りに並べ、フロアには踊れるスペースが確保されている。午後10時半頃にOrquesta Victoriaが登場する。今どき珍しい大編成の楽団で、ステージに11人並んだ姿はカッコいい。ピアノ、バイオリン=4人、バンドネオン=2人、チェロ、ビオラ、コントラバス、バス・クラリネットの編成である。弦セクションが充実している。歌手は男性2人が歌う。Café ViniloのオーナーでもあるCheche Ordóñezが第一バンドネオンを担当している。Cheche Ordóñezの合図で1曲目「Nostalgias」で始まる。イントロが長いのと非常に凝った編曲なのでこれがいつも聴いている「Nostalgias」なのかと疑っているうちに、暫くしてから聴きなれたメロディーが聞こえてきた。確かに「Nostalgias」であるが、正直言って難しい演奏と感ぜられる。続いて「La Tablada」の演奏、こちらは少しはタンゴらしさのある演奏である。専属の男性歌手Agustín Fuertesによる「Gricel」、同じくAriel Varnerínにより「Canción Desesperada」が歌われる。この頃からフロアではダンスをする若い人達が増えてくる。

この後歌物では「Pregonera」「Arrabal Amargo」「Sus Ojos Se Cerraron」などが歌われ、インスト曲では「La Casita De Mis Viejos」「Milonga Sentimental」などが演奏される。非常に凝った編曲をしているなという感じを受けたのと、全体的にはインストより歌のほうが聴きやすかった。またフロアでは多くの若者たちが歌のタンゴで楽しそうに踊っていたのが印象的であった。

## 5. Raúl Barboza=ラウル・バルボーサ（アコーディオン奏者）

出演場所：Café Vinilo, Palermo

ラウル・バルボーサはアルゼンチンのアコーディオン奏者で、主にフォルクローレを演奏する。1987年からパリに住んでいる。今回の旅でフォルクローレを聴きたいという希望もあったところへ、ラウル・バルボーサの出演を知り聴きに行った。午後8時頃に店につき、ステージを目の前にした最前列中央部のテーブルに案内され、地元の上品な中年女性3人組と相席になる。食事をしながら3人組と談笑し開演を待つ。ライブにはよく出かけるとみえ、ソレダー・ビジャミルを聴きにTorquato Tassoへも出かけたとのこと。この夜の観客は9割方地元の人と思われる。10時近くになり開演、Raúl Barbozaのアコーディオンに、Roy Valenzuela=コントラバスとNardo González=ギターが伴奏するトリオである。自作のチャマメ「Luz De Amanecer」から始まる。演奏される曲は殆んどチャマメ、ワルツ、ポルカなどであり、私には馴染みがない。「Que Nadie Sepa Mi Sufrir」が始まりようやく知った曲を聴きなんとなくほっとした気分になる。曲の終わるごとに観客からは大きな拍手と声援が送られるが、タンゴの演奏とは違う、ステージと

客席が一体となって楽しんでいる雰囲気が強い。トークを交え12曲ほどを一気に演奏したが、アコーディオンを中心にしたトリオの演奏にもかかわらず、最後まで飽きずに聴いたのは、ラウル・バルボサの哀愁を奏でるアコーディオンと甘美なメロディー作りの魅力なのであろう。この晩の演奏で特に印象深かった曲はどちらもカンシオンの「Alma Guaraní」と「Curuzu Vera」であった。

今回のブエノス・アイレス滞在中にCafé Viniloへは3度訪れることになったが、こじんまりとしたライブハウスで聴く音楽の良さを味わった。

## 6. タンゴ・ショー 演奏：クアルテート

出演場所：Esquina Homero Manzi, Boedo

San JuanとBoedo通りの角にはHomero Manziが「Sur」を書いた当時のカフェ El Aeroplanoがあったが、後に現在のEsquina Homero Manziに建て替えられた。昼間のEsquina Homero Manziはカフェのたたずまいで、内装、調度品、飾ってある写真などからいまでもTroiloやHomero Manziが現れそうな雰囲気をたたえているが、また実際近所の人たちが新聞を読んだり、談笑にふけったり、静かに窓の外を見たりと、半世紀以上前を想起させる風景となっている。私はこの雰囲気が気に入り数度足を運び、コーヒーを飲みながら「Sur」の書かれた頃を想像した。一転夜は400人ほど収容するレストラン・シアターに変わり、観光客が大型バス、ミニバンなどでダイナーとショー見物に訪れる。店頭貼ってあるポスターからショーの出演者のなかに憶えのある名前、バイオリンのCésar Ragoと女性歌手のInes Cuelloを見つけ、旅の最後の晩にこのショーを見ることにした。昼間何度か訪れて顔を憶えられていたせいも、ショーの晩は最前列のテーブルに案内される。土曜日の晩ということもあるのか、1階のテーブルは満席、2階に若干空席がある程度である。ダイナーが済んだ頃を見計らって、午後10時半ころにクアルテートの演奏は「El Amanecer」でショーが開始され、2曲目「Quejas De Bandoneón」では早くもダンサーの登場で、切れの良い華麗なダンスが繰り広げられる。観客からはやんやの喝采である。男性歌手Eduardo Espinozaの歌う「Sur」にも大拍手、San JuanとBoedoの角にある店のショーで早々と「Sur」を聴かせるとは心憎い演出である。続いて女性歌手Ines Cuelloの歌う「Malena」には感動を覚える。歌では「Desorientado」「Mi Buenos Aires Querido」などが歌われ、インストでは「Lo Que Vendrá」「Mala Junta」「Chiqué」「Romance De Barrio」「La Cumparsita」などが演奏され、ダンサー4組によるダンスが若干のアクロバットもまじえ華麗に演じられる。演奏はMatías Feijin=ピアノ、バイオリンは女性で名前は聞き洩らした（通常はCésar Ragoであるがグレコス楽団で訪日中）、Leonel Gasso=バンドネオン、Adrián Fanello=コントラバスのクアルテートである。各楽器のソロ演奏が良いうえにアンサンブルも良く、聴き応えのある演奏であった。歌手2人の歌は感動的で、ダンサーの踊りも切れがあり、非常に楽しめたブエノス・アイレス最後の晩であった。





# 東京タンゴ祭 2013

山本幸洋

アマチュア～プロが一堂に会するタンゴの祭典も4回目。今回は盛夏ではなく10月祭日の夕方からの開催で、会場は有楽町のみよりホール。通常のコンサートに近い設定が効果的だったのだろう、お客さんの入りもまずまずだし、翌日から出勤だとしても比較的負担の少ない良心的な？計画である。

出演はタンゴ祭の特長であるアマ3、プロ6グループの登場で詳細は別掲の通り。開演前には藤沢嵐子さんを偲ぶ映像がスクリーンに映し出され、追悼の気持ちとともに、襟を正してタンゴを聴くぞ！と気合いが入る。出演者が毎年替わっていく学生バンドのワセダ、今回はストリングスを多めに揃えたロス・ボジートス、双方ともフレッシュな演奏でタンゴ祭皆勤賞。このところ盛り上がるタンゴ早慶戦であるが、ワセダの向こうを

張る慶應はOBベテラン揃い。熱く演奏し、熱く歌った。初出場LAST TANGOは、あの映画を思わせるバンド名のとおり、アコーディオンを採用したクアルテート+歌。古いようで新しいような響きはコンチネンタル・タンゴというよりは現代的なグローバル・タンゴというべきか。加藤真由美と田中伸司を中心にしたキンテート・プラダはモダン・タンゴ。オマール・バレンテ編曲「想い出」はオマールが参加したバンゲアトリオを彷彿させる。

休憩を挟んで後半はおなじみの小松真知子とタンゴ・クリスタルから。幅広いレパートリーを確かな技術で演奏するのはさすがだし、いつもながら小松真知子の打ち付けるようなピアノの激しさにはタンゴのパッションが込められている。女性リーダーのバンドが続き、次もおなじみアウロラ。若手であるがすでに風格もある。しかし「リベルタンゴ」のアレンジはちょっと凝り過ぎて思うように思う。初期の「グリセール」には個性と伝統（といってもモーレスだが）の調和が感じられるのでアウロラが変わりつつあるのかもしれないが。京谷のオリジナル曲で揃えた京谷バンドは圧巻のステージ。冒頭曲のバンドネオン・ソロは陰影のグラデーションが素晴らしい。ピアノが乗り移ったようなトーンだ。クアルテートも素晴らしいのだが、（アウロラの）会田桃子のヴァイオリンが深みのあるトーンを出しているのが印象的だ。ラストは西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ。白いジャケットにボウ・タイをあつらえた衣装をばっちり決め、ダリエンソ・スタイルで「ロカ」から「ラ・クンバルシータ」までホールを満たすようなスタックカートで祭典を締めくくった。2014年のタンゴ祭も期待しましょう。



## 東京タンゴ祭2013～出演者と曲目

於：よみうりホール、2013年10月14日(月、祝)

### 第一部 17:30～

#### オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ

La Viruta	ラ・ビルータ	Vicente Greco
Comme Il Faut	コム・イル・フォー	Eduardo Arolas
Melancolico	メランコリコ	Julián Plaza

#### 慶應義塾大学KBRタンゴアンサンブル

La Última Copa	最後の盃	歌	Francisco Canaro
Prepárense	プレパレンセ		Ástor Piazzolla
Tomo y Obligo	交わす盃	歌	Carlos Gardel

#### ロス・ボジーツ

Jueves	木曜日	Udelino Toranzo	Rafael Rossi
Un Placer	ウン・プラセール(喜び)	Vicente Romeo	Juan Andres Caruso
Mano Brava	mano・ブラバ	Francisco Canaro	Juan Canaro

#### LAST TANGO

Ivry Sur Seine	イヴリーシュルセーヌ		田ノ岡三郎
Palomita Blanca	白い小鳩		Anselmo Aieta
El Último Café	最後のコーヒー	歌	Héctor Stamponi

#### キンテート・プラダ

Amurado	アムラード	Pedro Laurenz	Pedro Maffia
La Trampera	ラ・トランペーラ	Anibal Troilo	
Recuerdo	思い出	Osvaldo Pugliese	

### 第二部 19:00～

#### 小松真知子とタンゴ・クリスタル

Mala Junta	悪い仲間	Julio De Caro	
	出船～波浮の港	杉山長谷夫	中山晋平
El Choclo	エル・チョコクロ	歌	Ángel Villoldo
Vuelvo Al Sur	南へ帰る	歌	Ástor Piazzolla
Todos Los Sueños	夢の全て		José Colángelo

#### オルケスタ・アウロラ

	ゲスト・ダンサー：Hiromi & Natsu		
Verano Porteño	ブエノスアイレスの夏		Ástor Piazzolla
Libertango	リベルタンゴ		Ástor Piazzolla
Nada	ナダ		José Dames
Grisel	グリセール		Mariano Mores
La Salida	出発口		会田桃子

#### 京谷弘司クアルテート・タンゴ

Monologue	モノローグ	京谷弘司
Puglísimo	プグリシモ	京谷弘司
Recordación	回想	京谷弘司
Siempre a Buenos Aires	シエンブレ・ア・ブエノスアイレス	京谷弘司

#### 西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ

Loca	ロカ	Manuel Jovés
Desde El Alma	心の底から	Rosita Melo
Meta Fierro	メタ・フィエロ	Pintín Castellanos
El Arranque	エル・アランケ	Julio De Caro
La Cumparsita	ラ・クンパルシータ	Gerardo Matos Rodríguez

# 金沢蓄音器館

## タンゴ・コンサート

松本 外司（金沢市）

今、ステージやテレビで人気の「AKB」ですが、「AKB金沢」と言うと、何を思われますか。それは「甘海老、蟹、鰯」のことで魚の美味しい金沢にぴったりですね。

その金沢で、恒例となりました「金沢蓄音器館タンゴ・コンサート」が、2013年10月26日（土）開かれ、「いま蘇るタンゴの名盤 《戦前編》」のタイトルで21曲鑑賞しました。例年にも増して、関東、関西、中部から20名を越えるタンゴファンが参加され、島崎長次郎氏のタンゴにかける情熱あふれる名調子で、SPレコードから流れるタンゴを満席のファンとともに堪能しました。

当日のプログラムに寄せられた島崎氏の文をご紹介します。

タンゴが最も輝きに満ちていたのは、1910年代（大正）から1960年代（昭和）におよぶおよそ50年間だったといえよう。この間に多少の浮き沈みはあったものの、絢爛とした黄金期を構築し、世界にタンゴを大きく飛翔させたのは周知のとおりだ。

この誇るべき50年を振り返ると、それは、“SPレコードの全盛期”と重なりSPレコードこそは、まさに佳き時代のタンゴを語るかけがえのない生き証人となった。

そこで、12回目になる今年の金沢蓄音器館でのコンサートは、表記のテーマにより、じっくりとオリジナルの名盤を堪能していただく予定。古都金沢の秋のひとときを、是非ご一緒にどうぞ。

当日のプログラムは、“タンゴの架け橋 藤沢嵐子を忍んで”「ママ、恋人が欲しいの」他、“ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた名士たち”「別れの手紙」「わが悩みをこう歌う」を、“タンゴ・カンシオンの真髄を求めて”では「今宵われ酔いしれて」（コルシーニ）、「ノーチェ・デ・レジェス」（ガルデル）など、“小編成楽団の魅力を訪ねて”は「ロカ」（ピリンチョ）、「マタサーノ」（フィルポ）等3曲、メインタイトルになった“輝けるタンゴの黄金時代を飾ったヒーローたち”では、「コンパドロン」（フレセド）、「あなたを見つめて」（パチョ）、「ヌンカ」（ロムート）、「想い出のくちづけ」（カナロ）、「ジゴロ」（デ・カロ）、「大学生仲間」（オルケスタ・ティピカ・ビクトル）、「フェリシア」（カラベリ）など名演奏を9曲、最後の「傑作「ラ・クンパルシータ」の競演を聴く」では、オルケスタ・ティピカ・ロス・プロビンシァノスとプグリッシ楽団の名演を聴いて終了し

ました。

名器「クレデンザ」で聴くタンゴは、タンゴ黄金時代を飾った名手たちの、タンゴにかける情熱を改めて感じさせてくれた一夜でした。

コンサート終了後、席を近くの寿司店に移し、賑やかな懇親会となりました。この寿司店は参加される方々にはもうおなじみの店で新鮮な魚を賞味できます。この後「カラオケルーム」に席を移し唄の「競演」となります。これが、コンサートに参加される方のもう一つの楽しみで、歌うスタイルをじっくり拝見しますと、“R. ゴジェネチェ”を彷彿させるお方、大好きだった“アルベルト・デル・ソラール”そっくりな方、和製“M. シモーネ”風の方、元気な“アルベルト・ポデスタ”を思い出させるお方、とそれぞれ自分の世界に溶けこんで歌われています。これで第一日は終わり、翌27日（日）はマイクロバスで福井まで足を伸ばし、風光明媚な「東尋坊」と雄大な伽藍を誇る「永平寺」を見学し、今年の「金沢蓄音器館タンゴ・コンサート」は又明年の再会を約束して終了となりました。

本年は10月25日（土）14：00開催いたします。翌日のバス・ツアーは世界文化遺産に指定された五箇山の“合掌造り”など予定しております。

アメリカの有名な旅行誌から“世界でもっとも美しい駅”に日本で唯一選ばれた金沢駅の“鼓門”が皆様をお迎えます。“文化遺産”に指定された「タンゴ」を聴き、又、金沢の「和食」を味わっていただきたく、本年のコンサートへの、ご参加お待ちしております。



名器「クレデンザ」による 金沢蓄音器館タンゴ・コンサート 2013年10月26日（土） 於：金沢蓄音器館



# SAYACAを聴く

脇田富水彦

昨年10月31日銀座シグナスでSAYACAを聴いた。出演はSAYACA (vo) と北村 聡 (bn)、青木菜穂子 (pf)、鬼怒無月 (gt)、西嶋 徹 (cb) のクアルテート。



彼女のライブは他のタンゴ歌手のそれとは異なった独特の雰囲気があり、比較的若い客層が多く客数も増えている。タンゴだけではなくボサノバ調の曲や、英語の歌詞のものまでジャンルを超えたレパトリーの広さに驚く。後で分かったことだが、シグナスで彼女は以前ジャズを歌っていて店のオーナーに気に入られていたのだそう。そのせいもあり、一方では若い人たちやタンゴは初めてという人たちへの気遣いがあるらしい。

ジャズと云えばアドリブ演奏が基本で、メンバー紹介で名指しをされたら即座にアドリブソロで応えるというのが普通だが、SAYACAは「Silueta porteña」を歌いながらメンバー紹介を見事に遣ってのけたのである。紹介のタイミングとそれに応える演奏は息が合っていて、鳥肌が立つ思いだった。

彼女の歌は音程、リズム感、フィーリング、発音がしっかりしていて申し分ないことは言うまでもないが、歌だけではなくトークも楽しい。実は前々回？の夏にシグナスへ向かうため電車に乗っていたら、私の隣の座席に座っていた若い女性が突然「ギャー！」と叫んで隣の車両に逃げ込んだのだ。乗客は一斉に私の方を向いてチカんだと思っただろう。落ち着いて隣の空席を見たら背もたれのところにセミが這っていたのだ。その時のSAYACAのトークが“濁音は普通の音声よりも説得力がある”という内容だったのでビックリ！ 正に「キャー」ではなく「ギャー」であった。世の中には我が子を虐待したり、産んだ子を捨て歩いた信じられないバカ夫婦がいると思えば、最近SAYACAが5匹の捨て猫を持ち帰って里親を募り、メデタク全て里子に出した事など、心優しい。

話は横道にそれたが、彼女は毎回1～2曲新曲を採り上げている。今回はドミンゴ・フェデリコのYuyo verdeとアストル・ピアソラのPoema valseadoである。私の本音を言わせて貰えばYuyo verdeはよしとしても、もう少し古いところを歌ってほしい。

第2ステージになる時、ピアソラで15年も活躍した、あのパブロ・シーグレル (pf) が来店し

たのにはビックリ。そう云えば、今日出演の北村 (bn)、鬼怒 (gt)、西嶋 (cb) は彼と共演しているメンバーだからだろうけれど、ステージ終了後もSAYACAたちと随分話し込んでいたのは、今夜のSAYACAのライブに華を添え盛り立てた。

## 本日のプログラムは次のとおり

### 第1ステージ

1. Three colors of the sky (bn, gt, cb)
2. Gricel (pf, bn, cb, vo)
3. A un semejante (todos)
4. Valsecito (todos)
5. Aquel agosto (pf, bn, gt, cb)
6. Yuyo verde (pf, cb, vo)
7. Calling you (todos)
8. Silueta porteña (todos)

(\*1=鬼怒無月オリジナル)

### 第2ステージ

1. La Rayuela (bn, gt, cb) (P. Ziegler)
2. The nearness of you (gt, cb, vo)
3. Trenzas (pf, bn, cb, vo)
4. Vete de mí (todos)
5. Garden (pf, bn, gt, cb)
6. Uno (todos)
7. Poema Valseado (todos)
8. Milonga de la Anunciación (todos)

(\*5=青木菜穂子オリジナル)

Bis: El Choclo (todo)

## 日本人が作るバンドネオン完成

若きバンドネオン奏者として大活躍を続ける北村聡さんの父君北村寛氏が、エンジニアとしての経験を活かしてバンドネオンを手造りされたことを紹介する記事が出た(「奈良新聞」2014年1月5日)。奈良市在住のタンゴ愛好家和田ひろみさんから、吉澤義郎さん(N T A実行委員)に送られて来たもの。

日本製のバンドネオンがないことを聡さんから聞き、機械設計者として製作を決意されたという。

不要になったバンドネオンを小松亮太さんから譲り受けて解体し、5,000点以上の部品のほぼ全てを手造りされた由。唯一手造り出来なかったのは、蛇腹の四隅に付ける金具だけだったという。Facebook に公開されると世界中から称賛の声が上がっている由。

国産の材料にこだわる製作だったために「音色については聡さんから注文が付いた」が「次は演奏楽器としての材質を選び、本来の音を求めて行きたい」と語っておられるという。

(大澤)



# 「小松亮太 デビュー15周年記念スペシャルライブ」 を聴いて

大澤 寛

いつもながら熱気の溢れる公演であった。

2013年11月9日夜。場所は渋谷、文化村のオーチャード・ホール。

2012年9月のピアソラ没後20周年記念公演「エル・タンゴ」、そして13年初頭から開始した地方公演を含む4回の日本人版「ブエノスアイレスのマリア」のステージ化というピアソラに対する本格的な取り組みを続けている小松亮太のデビュー15周年記念公演である。タンゴ界以外にも多くの著名なゲストを迎えての対談・共演があり、そのせいでもあるのか会場にはいつものタンゴコンサートでは珍しい美しい和服姿が目についたのは、小松亮太の交際・芸域の広さを物語るものだろう。

第1部はゲストの人々の作品（「風の詩」=The 世界遺産、「八重の桜」のテーマ抜粋など）を主体にして、それらのゲストプレーヤーの華やかな演奏と小松との息の合った軽妙なやりとりが会場を和ませた。筆者にとっての特筆はあがた森魚の「バンドネオンの豹」。この人の舞台を最後に観てからどれだけの年月が経っていることだろう。健在は嬉しい。



第1部の曲目・演目を下記する。

「首の差で」（ガルデル）「目覚め」（八木正生 編曲・熊田洋）「スターネオン」  
「ジェラスマン」（いずれも鳥山雄司）  
「風の詩」（小松亮太・鳥山雄司）「八重の桜」（中島ノブユキ）「碧空」（リクスナー）  
「バンドネオンの豹」（ルジェーロ）  
「Indio del Tango」（鈴木慶一）そして最後のピアソラ2曲は「Adiós Nonino」



と「Libertango」



休憩後の第2部は小松亮太作品とゲストの上妻宏光作品を1曲ずつに古典タンゴを3曲、そしてピアソラを5曲という構成。“好きな曲を独断と偏見で”選んだとのこと。上に述べた「エル・タンゴ」「ブエノスアイレスの MARIA・日本人版」に次いで、アメリータ・バルタル、ギジェルモ・フェルナンデス、レオナルド・グラナドスを迎えての6

月29日の大舞台を終えた充足感が小松亮太にはあるのだろう。緊張感を失わない中に、いつもとは違う気楽さの様なものが見えた。まさに「俺のピアソラ」の世界。周到な訓練を積んだ“小松亮太ユニット”の手練れの演奏陣が揃う。歌は「ブエノスアイレスの MARIA」から Sayaca が「受胎告知のミロンガ」

第2部の曲目は次の通り。

「ブエノスアイレスの冬」(ピアソラ)「エル・アランケ」(フリオ・デ・カロ)

「シン・ナダ・パルティクル」(小松亮太)「我が街へのノクターン」(トロイロ)「エル・チョクロ」(ビョルド)「TMW」(上妻宏光)そして以下はピアソラで「フーガと神秘」「受胎告知のミロンガ」「アレグロ・タンゲービレ」「五重奏のための協奏曲」

この日に特に感じたのは、実力と情熱と工夫、それを友情と卓越した技術で支えてくれる優れた仲間があれば、世代・文化・ジャンルの違いを超えて、人々にタンゴをもっと身近なものに感じさせることが出来るのではないかとということである。躍進を続ける小松亮太には“今、それをやれるのは俺”という気持ちをずっと抱き続けて欲しい。



(写真は全てコンサート・イマジン提供@西田航)







# オルケスタYOKOHAMA

## 演奏会を聴いて



杉山 滋一

横浜アーツフェスティバル実行委員会の主催で“横浜音祭り2013”が市内のさまざまな場所で多彩なイベントが開催された。その連携イベント秋の芸術祭「港横浜・タンゴフェスティバル」と銘打って2013年11月10日（日）、横浜市開港記念会館においてオルケスタYOKOHAMAの演奏会が開かれた。プエノスアイレスと同じ港町横浜はタンゴが似合う街ということで、ここ数年間の進歩が著しいオルケスタの演奏に大いに期待出来るものがあるし事実大変に充実した内容であった。

プログラムは三部構成である。

第一部は「タンゴは音の魔術師」というタイトルでアルゼンチン、ヨーロッパ、そして日本の曲を取り混ぜ、叶千穂とグロリア米山の唄を添えて6曲演奏された。

曲目は以下のとおり。

1. 夜のタンゴ
2. 素敵ミロンガ                      Milonga brava
3. 行方定まらず                      Sin rumbo fijo.
4. 夜のプラットホーム              唄 叶千穂
5. ラ・クンバルシート              La cumparsita              唄 グロリア米山
6. わが母へ                              A mi madre

11名のフルメンバー（Bn4,Vi3,Vi1,Pf,Cb,Gt）による豊かなサウンド、引き締まったアンサンブルと歌が楽しめる。平田耕治、池田達則、専光秀紀の3名を中心にして安定感のある演奏が繰りひろがる。曲目選びにも目配りがされて、和欧亜のバランスも良く歌あり、ミロンガ、ワルツを織り交ぜて手堅い構成がされていた。4曲目「夜のプラットホーム」については2013年8月に亡くなった藤沢嵐子さんに追悼のコメントがマエストロ斎藤氏から述べられた。また遡れば2曲目の「Milonga brava」の始まる前に、13歳の南川紘子さんのタップダンスのさわりも披露され、満場の観客から盛んな拍手が寄せられた。

マエストロ斎藤氏による曲の合間のコメントも、学生時代のタンゴバンドに始まる経歴と楽団運営やアルゼンチンへの演奏旅行、Osvaldo Puglieseとの親交におよぶ長い時間を通しての含蓄のある話などに中々聞かせるものがあった。「A mi madre」については、軍事政権とマルビナス

紛争に関して反対ないしは厭戦の無言の批判曲として訪亜当時にずいぶん聴かれていたことなどの体験談を交えて色々話をされた。

第二部の前半にはメンターオ (MENTAO) の登場である。メンバーはVI専光秀紀、赤松丈寛、Bn池田達則、Pf松永裕平、Cb大熊隼の5人。Bn池田達則はBaAsでコロールタンゴのリーダー R. Álvarez に師事して、みっちり本場のタンゴエッセンスを学んできている。Álvarez から Mentao (大したもんだ、ドえらいもんだの意) と褒められた言葉をそっくり用いてグループ名にしているとのことである。この五重奏団の音造りは当然のことながらプグリエーセ指向で、スタッカートを叩き出すバンドネオンの弾き方は膝に打ち付けるようなパワフルで若々しい奏法で自信に満ちたものであった。

曲目は以下の通りである。

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1. エマンシパシオン | Emancipación |
| 2. フェステハンド  | Festejando   |
| 3. パタ アンチャ  | Pata ancha   |
| 4. ラ マリポーサ  | La mariposa  |

いずれも編曲はプグリエーセ楽団が使用していたものを用いている。4曲とも力感のある演奏でそれぞれの奏者が力を出し切った結果であろう。鋭く切れる力強いリズムの池田達則のバンドネオン、艶やかなビルトゥオーソ振りの専光秀紀のバイオリン、しっかり重量感のあるPfとCbのベースラインなど聴き処の多い演奏であった。

第二部後半はガラリと雰囲気を変えて飯泉昌宏のギターと専光秀紀のデュオがステージに上がった。演奏に先だってマエストロ齋藤氏から2014年5月頃にこの飯泉・専光デュオにCbを加え、さらにバイオリン陣を増員してロマンティックなタンゴをやる方向性で新たなグループ結成を計画しているとの発言があり、どんなことになるのか興味をそそられた。



グロリア米山の歌を交えて以下の4曲が演奏された。

- |               |                       |          |
|---------------|-----------------------|----------|
| 1. 小作人        | Aparcero              |          |
| 2. 恋人なんていなかった | Nunca tuvo novio      |          |
| 3. 鮫          | Escualo               |          |
| 4. 想いの届く日     | El día que me quieras | 唄 グロリア米山 |

ギターの飯泉昌宏は名手Anibal Ariasを師として腕を磨いてきたが、ここでは編曲も担当している。「恋人なんていなかった」はタンゴロマンサの香り豊かなA. Bardiの名曲だが、美しい曲を抒情味をもって美しく聞かせることの難しさを感じた演奏だった。編曲にも一工夫が必要で、手を加え過ぎたせいか専光秀紀はややテクニカルに走ったプレーで、もっとしっとり感が欲しかった。「鮫」はその逆で彼の技量を最大限に発揮した演奏でF. Suárez Paz風の見事で立派なものであった。グロリア米山が感情豊かに「想いの届く日」を歌って休憩に入った。

約20分の休憩の間、ステージの上で齋藤マエストロと島崎長次郎NTA会長（当時）の2人による8月逝去した藤沢嵐子さんについてのトークが行われた。「タンゴの女王」と謳われた藤沢さんの唄に対する姿勢の厳しさ、研究心の強さ、稽古熱心さなど日々の研鑽と並大抵でない努力について語られた。また昔若かった齋藤マエストロが藤沢さんから受けた大きな影響についても話が尽きなかった。

20分の休憩後のステージには平田耕治クアルテート（Bn平田耕治、Vl那須亜紀子、Pf加畑嶺、Cb齋藤直樹）が上がった。

演奏曲目は以下のとおり。

- |                    |                                    |
|--------------------|------------------------------------|
| 1. ラ プニャラーダ        | La puñalada                        |
| 2. タンゲラ            | Tanguera                           |
| 3. ブエノスアイレスの春      | Primavera porteña                  |
| 4. タンゴロイド組曲第一番「始動」 | Tangoroid suite No.1 [El arranque] |

音大の先輩後輩の仲間でもいつもユニットを組んでいるので呼吸の合っていて楽しく聴くことが出来る四重奏団である。「ラ プニャラーダ」はミロンガのリズムに乗った快適な演奏、「タンゲラ」は馴染のフランチーニ=ポンティエールの型に入れて平田カラーを出した独自のスタイルで聞かせる。ピアソラ作品「ブエノスアイレスの春」では佐藤利幸&中山満起子のバイレがステージを飾った。那須亜紀子のバイオリンがピアソラの世界を際出させる出色のプレーを示していた。4曲目は平田耕治の自作自演でカンバタンゴとのCDタイトルにもなった作品でジャズ的なフィーリングも取り込んだ進化型のタンゴ。ベースのリズムやバンドネオンとピアノのアドリブなどフュージョンともいえる表現が今日的な熱演であった。

ここから第三部に移り「ヨコハマタンゴ」というタイトルで再びオルケスタの登場。

曲目は次のとおりである。

- |          |                  |        |
|----------|------------------|--------|
| 1. 横浜タンゴ | [La última copa] | 唄 藤田 翔 |
| 2. 粋     | Chiqué           |        |

- |              |               |         |
|--------------|---------------|---------|
| 3. 心の底から     | Desde el alma |         |
| 4. ジェラシー     | Celos         |         |
| 5. 孤独な女      | La solita     | 唄 南川 絃子 |
| 6. 1900年代の響き | Bordoneo 1900 |         |
| 7. アンコール     | ラ クンパルシータ     |         |

最初の「横浜タンゴ」は意表をつく作品である。元来J-Rock系の歌手である藤田翔が”La última copa”のメロディに乗せて日本語の創作詩を歌うという格好になっている。「港横浜はタンゴが似合う街、夜の石畳から大栈橋へ、おれの街横浜」などと港横浜タンゴフェスティバルを謳いあげる詩がロック風にシャウトして歌われて満場を沸かせた。「粋」と「心の底から」(ジョルジュ高橋&リタの鮮やかなステップのステージダンスが披露された)そして「1900年代の響き」はプグリエーセの形で演奏された。いずれも手なれた曲で楽しく聞くことが出来た。トップバイオリンの専光秀紀が満を持して腕をふるった「ジェラシー」のあと、13歳の南川絃子が「孤独な女」を歌った。齋藤マエストロによれば故大岩祥浩NTA名誉会長のご長男でNHKスペイン語講座で著名な大岩功氏 (NTA会員) の指導で歌詞の中にあるBsAs言葉をいかに上手に表現に結び付かせるかを勉強中とのことであった。ミロンガの細かい譜割りに乗せた歌詞がやや不明瞭なところがあり、音程の点でフラットになる傾向の克服が望まれる。13歳というまだ声が決まらない年齢によるところがあるかもしれないが、こういった機会にチャレンジする意気を大いに買いたいとも思ったし、会場の温かい拍手にそれが表わされていたようだ。アンコールにはOsvaldo RequenaがオルケスタYOKOHAMAのために書き下ろした編曲による「ラ クンパルシータ」が演奏され全25曲4時間におよぶコンサートの幕が下ろされた。聞くところによるとこのオルケスタの愛好者で組織する友の会参加者が増えているようで、今後ますますの活躍を大いに期待するものである。







# 「Nochero Soy」 SPレコード・コンサート

佐藤 進（上尾市）

12月23日に年末恒例となった「ノチェーロ・ソイ」の蓄音器HMV163によるSPレコード・コンサートを聴いた。2010年に新橋の「Cafe Himiko」で始まったこの催しは、昨年より四谷の「Sin Rumbo」に場所を移して、今回で通算4回目となる。最近蓄音器でレコードを聴く機会は少なくなり、年末になるとこのSPレココンを楽しみにしているファンも多い。前回迄はコメンテーター席として設けられた奥の方の場所で聴いていたが、今回はレココンのコメントを書くようにとの仰せなので、前から2列目の席を確保したのが正解で、HMV163からのまろやかな音が適度なボリューム感で伝わってくる。

「ノチェーロ・ソイ」主宰の宮本政樹（会員）さんの挨拶に続いて、司会の中村尚文（会員）さんによるコメンテーター紹介からプログラムは開始された。

第一部は「タンゴ愛好家による3曲選」である。最初の登場は笠川慶次郎さんで、レコード蒐集にまつわる苦労話、思い出話をまじえ、今年は日本流に言えばフランシスコ・カナロ50回忌の節目からキンテート・ピリンチョによる「Rayero」で開始された。蓄音器で聴くキンテート・ピリンチョは、いつも聴いているよりも高音が少しまろやかになり、蓄音器の音を実感する。続いてファン・ダリエソの「Paciencia」、最後はディ・サルリ博士らしくカルロス・ディ・サルリの「Don José María」で締めくくった。

2人目の登場は庄子清右エ門さんで、3曲とも「No Te Engañes, Corazón」を、2曲がトリオ・ヘデオンの、3曲目にカルロス・ガルデルということで歌の聴き比べといえる。トリオ・ヘデオンのうち1曲は替え唄の詞が付いているので、これが「No Te Engañes, Corazón」かというほどに違った曲に聴こえる。探求心旺盛な庄子さんらしく、珍しいSP音源と蘊蓄を傾けた話しには興味をそそられ面白く聞いた。持ち時間のオーバーを気にしながら参会していた阿保郁夫さんを紹介されたのには庄子さんの気配りが感じられる。

3人目は自身の「タンゴ・クラブ市川」の主宰をはじめとし、タンゴ界で大活躍する弓田綾子（理事）さんである。夜一人で蓄音器を回しては、温かみのある音に酔いしれるほどの蓄音器ファンであるだけに、この日のコメントも一味違った切り口からの解説を興味深く聞いた。ロベルト・フィルポ四重奏団の「El Esquinazo」では、この曲を聴いていると街角の風景が思い浮かぶとか、アドルフォ・ペレスの「Tango Argentino」では作者の作った当時の思いを想いうかべながら聴いているなど、想像力豊かなところを感じさせる。ファン・ダリエソ演奏、エチャグエ歌の「Yo No Sé Llorar」では、アルゼンチン滞在時のエチャグエとの思い出話をややうっとりした表情で語っていた。

4人目は齋藤富士郎（理事・タンゲアンド編集長）さんである。女性歌手をよく聴き、女性歌手の研究に熱心なだけに、3曲中2曲は女性歌手の歌を用意された。藤沢嵐子の二重録音による「Mama Yo Quiero Un Novio」とドラ・ダビスの「Mi Refugio」である。ドラ・ダビスの歌をレココンでかけると、顔が見たいというファンがいるとのことで、この歌手の写真を持参して見せてくれた。もう一曲はアルベルト・ピラの「Garufa」である。齋藤さんの話しのなかで蓄音器はインストよりも歌が良いというコメントがあり、そのつもりで聴くとなるほど歌手の声が浮き出てるように、目の前で歌っているような感じがする。

5人目は飯塚和美（飯塚久夫副会長夫人）さんである。飯塚久夫さんが所用で欠席のため急遽代理として登場された。選曲は和美さんが解説しやすい曲を飯塚さんが用意したとのことであるが、解説は和美さんの視点から見たタンゴが語られた。オラシオ・サルガンの「Los Mareados」、ペドロ・ラウレンスの「Mala Junta」、ファン・マグリオ・「パチョ」の「Noche De Reyes」が紹介された。「Mala Junta」はタンゴのエッセンスの詰まった一番好きなタンゴとの解説があったが、蓄音器は今まで気づかなかったペドロ・ラウレンスの演奏のすごさを教えてくれた。



第二部は島崎長次郎（会長）さんの解説で「古き佳き時代のタンゴを訪ねて」というタイトルである。プログラムは3部のサブタイトルから構成されている。いつもながらプログラムのタイトル名には感心するばかりである。タイトルを見ただけで聴いてみたいという気にさせる、加えて内容はタイトルに恥じないものばかりであり、今回も名実ともに充実している。サブタイトルの1は「改めて捧げたい“嵐子”へのオマージュ」と名付けられ、8月22日に逝去された藤沢嵐子への追悼の意味を含め、藤沢嵐子＝テイピカ東京による「Tomo Y Obligo」とテイピカ東京の「懐かしのブエノスアイレス」がかけられた。解説によると男性歌手の専売のような「Tomo Y Obligo」に挑戦した藤沢嵐子の歌は、HMV163から艶のある歌声が発せられ目の前で歌っているような錯覚に陥る。次のサブタイトルは「ヨーロッパの哀愁を紡いだタンゴの精鋭たち」で、アルゼンチン出身でヨーロッパで活躍したタンゴ人の中からインペリオ・アルヘンテーナの「Danza Maligna」、ロベルト・マイダの「Alma De Payaso」そしてトリオ・アルヘンテーナの「Chiqué」が紹介された。3曲ともいつ聴いても愛好家の胸に響く歌・演奏である。最後のサブタイトルは「往年のタンゴ界を飾った名匠たち＜戦前編＞」で、これぞ名曲・名演間違いなしの8曲がかけられ、目の前の蓄音器から流れるまろやかな音色にただ聴き惚れるばかりであった。オスバルド・フレセドの「Felicia」に始まりオルケスタ・テイピカ・ピクトルの「Tus Besos Fueron Míos」で締められた。島長節の名解説とともに聴く蓄音器より流れ出る名演奏はタンゴ愛好家にとっては至福の一時である。

今回参会者は「なごや蓄音器クラブ」の勝原良太（会員）さんを含め50人、蓄音器特有の面倒な操作を要する皿回しは吉田義之（実行委員）さんが無難にこなし、参会者全員には「岡山SPタンゴ・クラブ」の藤岡末男さん提供によるSP音源を詰め込んだCDの記念品が配られた。来年はどんなSPが聴けるのだろうか、今から楽しみである。

（2013年12月26日記）

（なお会員の役職名は当時のもの）

第52回(2013年)

## タンゴ・ワセダ・リサイタルを終えて

藤木立夫（横浜市）

### ◎その歴史の一端を記述してみた

初めに、タンゴ・ワセダは1962年11月に第一回記念リサイタルを開催し、今日迄延々と積み重ねることが出来た唯一の学生タンゴバンドである。或る時はその時代の波に押し流されそうになったこともあったであろう。又、そのサークルの宿命である集まり散じて、即ち入退部の変動もそれに伴う補充も……。そして紆余曲折、幾度かの苦難を乗り越え、今日見事に52回目のリサイタルを催すことが出来た。誠に喜ばしい限りである。

これも偏に、サークル・メンバーの一途な研究心と努力の賜物であると賞賛したい。



### ※タンゴ・ワセダ創設・その10年の足跡

創部1951年（S26）早稲田大学軽音楽部設立と共に正式公認サークル「ワセダ・タンゴ・バンド」として誕生する。翌1952年（S27）当時のアルゼンチン大使館の書記官で日本タンゴ界発展に尽力されていたファン・ホセ・オルティス氏が名付け親となって、現在の「オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ」と改名した。'50年代の初めの頃、この時期は戦後という言葉に象徴される通り、まだ不安定な世相であった。

私が初めてタンゴ・ワセダの演奏を耳にしたのは、1957年（S32）創部7年目の秋の学園祭であった。黒い詰襟姿の学生達、そのサークル・メンバーが学内ステージでタンゴを奏でている光景に出会い、見事なアンサンブルに聴き入った記憶がある。

### ※60年代に入り10年目の節目を迎えた頃

'61年の暮12月、アルゼンチンから国賓としてフロンディシ大統領の初めての来日があり、帯同して日本のタンゴファンが待ち焦がれていた“タンゴの王様”フランシスコ・カナロがその楽団を伴い文化使節として日本にやって来た。

時の皇太子夫妻臨席のもとに大統領夫妻を迎えて、フランシスコ・カナロ楽団に依る演奏会が

「アルゼンチン文化の夕べ」として新宿コマ劇場で催された。

そして、大統領は来日中に早稲田大学を訪問され、名誉学位が授与された。地球の裏側のタンゴの国アルゼンチンからの大統領は、親しみのある語り口で自国の文化について講演を行い学生達から盛大な喝采を受けた。その時の様子が今に伝えられている。

上記のエポック・メイキングな出来ごとに触れたタンゴ・ワセダ・サークルの学生達は大きな自信と勇気を得たことは間違いないだろう。

## ※年も明けた1962年、早稲田大学創立80周年の記念の年であった。

タンゴ・ワセダ創部10年を経過した頃、タンゴ・ブームの波に乗り期も熟し、先輩達が築き上げてきた基盤を大切に、10周年の記念演奏会を催すことになった。その記念の演奏会を正式に第一回「オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ リサイタル」と銘打って1962年11月8日 東京文化会館に於いて開催された。その演奏会の司会には時のタンゴ界の重鎮・高山正彦氏を招き、プロの女性タンゴ歌手・前田美知子、村山あつ子両名のゲスト出演、同時に慶応義塾KBRタンゴ・アンサンブルの友情ゲスト出演もあり、そして苦節10年を共に味わった先輩もOBバンドを編成し出演するという創設第一回タンゴ・ワセダ リサイタルの門出に相応しい盛大な演奏会であった。

引き続き第2回リサイタルが同じく東京文化会館で1963年11月30日に行われた。前年同様に快く引き受けていただいた高山正彦氏の司会で始まる。歌手はスペシャルゲストにタンゴの女王藤沢嵐子、男性歌手国井敏成の出演であった。この年も先輩格のKBRタンゴ・アンサンブルの友情出演を受ける。

今思えば、プロの一流歌手がアマチュアの学生バンドの演奏で歌うというのは考えられないこと・・・時のタンゴ・ワセダのメンバーにとってこれ程の至福は無かつただろう。

これは学生メンバーの若さと純粋さ、そして彼らのタンゴへの情熱に打たれた高山正彦氏の深い思い入れとが相まって為し得たことであろうと推察する。

## ※学生バンド時代到来する

50年代後半から60年代に掛けて各大学でも前後して音楽のジャンルを越えて学生バンドが次々と誕生、タンゴバンドも都内主要大学に誕生して、タンゴ演奏での交流も活発となる。他大学との合同コンサート、大学対抗タンゴ・コンサート、そして軽音楽定期演奏会等が頻繁に行われ、音楽を通して学生間の交流の場を広げていった。

80年代に入りタンゴ界も下火になる。年月を重ね80年代に入るとタンゴ・ブームも下降線を辿り、80～90年代に至り波乱万丈の時期も・・・そして、タンゴを奏でるサークル活動にも幾度かの危機もあったであろう。先輩達が築き上げてきた伝統の灯を消すことなく、当時のメンバー達の必死の努力があったことも、今日までの足跡が如実に物語っている。





そして90年代後半に至り、幾分かの明るい兆しが見えてきた。

## ※創部60年を経て

タンゴ・ワセダも時の流れに沿い、2011年11月創立60年を迎え、その記念のパーティが盛大に一ツ橋如水会館で行われた。その折、私も招かれ仲間と連れ添って出席する。

現役学生の主催でOB、OGの出席、50年前の第1回、第2回リサイタルに出演した時の往年のメンバーの顔も見える。バンドも年次別構成での演奏あり、そして大学の垣根を越え同時代に共にタンゴを奏でた仲間達の演奏がこの記念に華を添えた素晴らしいパーティであった。

さらに同年12月26日はタンゴ・ワセダにとって大きな節目となる。第50回リサイタルが大隈記念講堂で催された年でもあった。

## ◎第52回リサイタルに臨んで（2013年12月24日）

冬の寒さが身に沁みる12月24日クリスマスイブ、急ぎ足で会場の四谷区民ホールへ向かった。今年度のリサイタルの演奏に触れながら、印象に残った曲を思い浮かべ、記したい。例年通り3部構成で始まる。

最初の1曲目、ビセンテ・グレコの“La Viruta”（かんなくず）は緊張の余りか、音出しも全体に弱く感じられるのは聴く側の所為か……2曲目“A Evaristo Carriego”、3曲目“Comme Il Faut”と演奏が進むに連れて緊張も解け、落ち着きを感じさせる程に音程も安定してきた。1部最後の曲“Loca”には恐れ入った。今年のタンゴ・ワセダを象徴する乙女達が変身し、響きよく勢いのよい“Loca”を聴かせて呉れた。

ステージに目を注ぐと驚いたことに、まず男性メンバーより女性メンバーの多いことに気が付く。幹事長初め、バンドマスター、各パートリーダー、全て女性であることに……これは過去に前例のない初めての試みだろう。流石にタンゴバンドの要のバンドネオンには4年生男子も



助っ人出演、他にVn 2名、Cb 1名、後半に加わったG 2名が男性であった。

2部の少人数編成メンバーでの1曲目はメンバーの牽引者川上彩子のPF、オマール・バレンテの代表曲「鍵盤の悲しみ」を見事な流れる様なタッチで弾きこなし楽しませて呉れた。そして今年のピアソラは・・・と思いきや、バンドマスター朴慧蓮（パク・ヘリョン）の肝煎りの曲“Lunfardo”。メンバーの練習に練習を重ねた成果、まずは無難と思える程に聴き応えがあった。

そしてプログラム3部、タンゴ・ワセダ女性メンバーの初めて耳にする歌声、韓国からの留学生、具利珍（ぐ・いじん）が“YuYo Verde”（緑の薬草）を見事な歌唱力で爽やかに歌い上げたのが印象的であった。そしてプログラムの最後の曲は“Sueño De Tango”。大物マエストロ フェデリコとレデスマ共作の難曲。練習を重ねたメンバー全員の力を出し切った力強い演奏であった。

番外 オトラー！ 何を準備したか関心のあるところ。今年の圧巻は耳馴れた“Por una cabeza”（首の差）であった。編曲も良く、素晴らしいアンサンブルに思わず息を呑む。

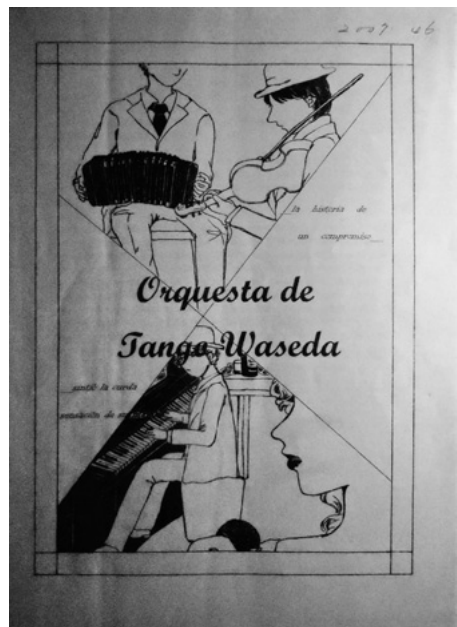
そして締めくくりは、云わずと知れた“La Cumparsita”メンバー総出の合奏。客席も手を叩いて調子を合わせての大合奏となった。

今年のメンバー達も数々の演奏会に参加し、その中には思い掛けない出演もあったであろう。このリサイタルの最後に思い浮かべるのは、振り返りつつ・・・安堵した気持からのその微笑は・・・充実した満足感と達成感であろう。プログラム14曲、オトラ2曲、全16曲を見事な演奏で終えることが出来、聴衆からの喝采のもと、今年度のリサイタルは幕となる。

## ※最後に

昨年に引き続き、司会・案内役をこのリサイタルで務めて頂いた日本タンゴ・アカデミー副会長（現会長）の飯塚久夫氏が、奥の深いタンゴの味とそのエキスを存分に判り易く、絶妙な話術で会場を湧かせ、盛り上がり大きく寄与されたことに心からの敬意を表するものである。

本日第52回リサイタルを聴き終え、シニアの一人として、若さを重ね合わせることが出来たことを実感しつつ・・・筆をおく。



# タンゴの歴史講演会報告

齋藤 富士郎

アルゼンチン国立タンゴ・アカデミー ワルテル・ピアッツァ (Walter Piazza) 博士の講演会が2014年1月11日～13日に池袋のタンゴリアルダンスアカデミーにおいて行われた。この講演会はブエノス・アイレス・タンゴ・カンパニーが主催したもので学術的なものではなかったが、タンゴの発祥から今日に至るタンゴの歴史を画像と音楽を使って要領よくまとめたものであった。内容はNTA会員にとっては殆ど既知のことであったが、以下の話題はあまり知られていないと思われた：

- (1) バンドネオンは元々持ち運びできないパイプオルガンの代用品であったことは渡邊士郎氏がタンゲアンド・エン・ハポン誌13号に書かれているが、実際、今日のドイツの教会でバンドネオンがそのように使われている場面の動画の紹介があった。バンドネオンは複数台で、どのようなタイプか詳細は不明であるが、クセロ式のようなものも見えた。
- (2) アルゼンチン北部の貧しい村で、若者がワインのパックをつぶして、幾重にも重ねて貼りあわせ、両端にバンドネオンのボタン面のコピー画像を貼り付けて練習している動画の紹介があった。音は出ないのにどうして練習できるのか不思議に思えるが、どうなのだろうか。

## 会員アンケート

### Chiqué 3曲選

アンケート専用アドレス (2013年秋号13頁記載) が一時期不調であった可能性があります。応募原稿を一部修正したいというお申し入れを電話で頂いた方の原稿が受信出来て居りませんでした。

今後はアンケート原稿を [hdomingo@bc4.so-net.ne.jp](mailto:hdomingo@bc4.so-net.ne.jp) 宛てにお送り頂くようお願いいたします。なお必ず表題を「アンケート」と明示して下さい。

そして本号に掲載されていない方で既にメールを送信頂いた方々がありましたら、お手数ですが上記宛てに再送をお願いいたします。

(大澤)

## 池田みさ子とロス・アミーゴスの定期演奏会を聴いて

# 感動を呼んだ“父の衣鉢を奏でる姿”



島崎 長次郎

早春の気配の漂う3月22日の土曜の午後、池田みさ子（ピアノ・当会会員）の率いる“ロス・アミーゴス”の3回目の定期演奏会が、駅からほど近い「恵比寿アートカフェ・フレンズ」で開かれた。周知のとおり、みさ子さんはバンドネオンの名手でオルケスタ・ティピカNHKなど楽団の指揮者として活躍された故・池田光夫（元当会会員）氏の愛娘で、父が晩年に主宰した“ロス・アミーゴス”のピアノを担当し、タンゴの真髄と演奏の骨法を直接に学んだ。現在の活動はその名称と合わせ、まさにその父の衣鉢を継いだもので全体に溢れるような熱い思いが漲って感動を呼んだ。聞くとところによると、当日は奇しくもその父の誕生日でもあり、また、今年は75才で亡くなった父の13回忌にあたることもあってか、ことのほか思い入れも強かったであろう。

◇プログラムの構成は、1部が「エル・チョコクロ」や「カミニート」などのほぼ古典の名曲で固められ、2部がピアソラの「チキリン・デ・バチン」「ブエノスアイレスの冬」ほか、モダンな傾向の作品が生まれ、意欲的な演奏を聴かせたが、進行上で特に効果的で感心したのは要所に取り入れたナレーションだった。たとえば、オープニングで哀愁を帯びた古いタンゴの音源をバックに流れたそれは、♪ “……今から140年前、アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスの小さな港町の酒場で、貧しい移民たちが日ごろの不満を踊りにし、歌にし、タンゴは生まれた。タンゴが奏でたメロディーは、人々に勇気を与え、また、ときには苦しみをともに分かち合った。それは生きる力となり、人生そのものになっていく…、そんなタンゴに人生をかけた父から受け



継いだタンゴの魅力が、一人でも多くの人々の心の中に届くことを願いながら、今宵も始まる。タンゴとともに、父の魂とともに……” ♪。後で何うと、これは妹さんとの合作で、妹さん自身がマイクで語ったとのこと。しっとりとした雰囲気、語り口で、とても感銘を深くした。

◇メンバーは、Violín = 吉田 篤、宮越建政、Bandoneón = 鈴木崇朗、Contrabajo = 齋藤 順、Piano = 池田みさ子、Canta = 西澤 守。それぞれにいまやベテランのつわもの達で、存分に場を盛り上げ、場内を沸かせてくれた。

レストラン形式の場内は超満員でおよそ80名。女性が多く、終始和やかな雰囲気に満ちて、楽しい演奏会だった。次回は、父光夫氏の名アレンジとして知られた和製タンゴ「お先にどうぞ」「命くれない」を、是非ともレパートリーに加えて欲しいと、切に念じながら会場を後にした。



# Chiqué 3 曲選

## 第 1 回発表

### 岩垂 司 (札幌市)

1. Edgardo Donato, RCA Victor 37872 (1936) , 日RCA RA-5430
2. Osvaldo Pugliese, Odeon 55695 (1953) , 日Angel OH-9023
3. Juan D'Arienzo, RCA Victor 60-0054 (1942) , 日Victor RA-5060

1. リズムに乗った躍動的な演奏。案外これがこの曲本来の姿なのかもしれない
2. 説明不要の決定番。聴き終わって思わずため息が..
3. ダリエンソのいつもと少し違うリズムの形。サラマンカの好みか？

### 齋藤 富士郎 (町田市)

1. ペドロ・マフィア楽団 J1697B (日コロ) (S P) G. 1930-1931

このS PのA面はE. ボール楽団の「ラ・クンパルシータ」で、若き日の高山正彦氏が、ある時、タンゴを知らない友人にこのS Pを聴かせたところ、彼は「「チケ」の方が良いではないか」と言ったそうです。そこで高山氏は「そんなことはない、クンパルシータの方が良いに決まっている」と力説されたそうです。後に高山氏はA. M. P. のレココンでそのことを振り返って「友人の言っていることの方が正しかった。今となって大いに反省している」と述懐されていたことを思い出します。

2. R. L. プリニョ楽団 CD-1163 (A. M. P.) G.1929-1931

自作自演ですがこれより名演はいくつもあります。でもやはり自作自演は挙げなくてはとしました。

3. I. コルシーニ (歌) 5234B (EMI) (L P) G.1928-6-13

無理に付けたような歌詞で、コルシーニは如何にも歌い難そうですが、それでも歌いこなしているのはさすがです。歌の「チケ」は珍しいので入れました。

### 加藤 徹司 (町田市)

1. Osvaldo Pugliese 楽団 1979.10.10 FM-東京スタジオ

デンオン・ライブステージ 生放送奏者の息づかいも聴き取れる此の楽団最高の演奏でした。

2. Francini-Pontier 楽団 1973.4.4. 来日演奏会ステージ  
ステージバージョンで各奏者のソロもたつぷりレコードでは聴けない迫力のある演奏が楽しめました。
3. R.L.Brignolo 楽団 ブルンスイック：1901 G：1929  
自作自演 バンドネオン・ソロもたつぷり聴けます。

## 山根 洋 (横浜市)

1. Osvaldo Pugliese 1953年録音 Odeón  
2. Aníbal Troilo 1952年? tk  
3. Julio Pane ~ Bn.solo 2006 ?年 ( epsa 0791-02)

まず、わたしが初めてアルゼンチン・タンゴを聴いたのは、タンゴに関して予備知識など、全く無いまま、という状況でした。1952年か、53年の初め頃、高校3年の時でした。クリスマス・レコードのキャンペーンだったと思います。多分、その時聴いたのはアニバル・トロイロでした。曲目など分かるはずありません。そんなことから、タンゴに興味を持ち始めました。

福岡で、当時の "SEMI" に入会し、聴き込んでいくようになりました。ということで、このチケは、比較的早い時期に聴いたものだと思います。

プグリエセ、トロイロどちらも、当時の SEMI のレコ・コンで聴いた、と思います。

まず、プグリエセ。ずっと後になって映像で見る機会があり、バンドネオン陣のあの強烈なスタッカート ~ 全体重をたたきつけるような奏法にこれこそがアルゼンチン・タンゴだと、背筋がゾットするような感覚にとらわれたことが、脳裏に焼き付いています。

全くの余談ですが、プグリエセの初来日は私は福岡で見ましたが、脳裏にあったあのプグリエセのスタイルは全く見られず、コンサートが終わって、一緒に聴きに行った友人たちと、本当に徹夜で「あれはプグリエセではない！」と 喧々諤々の論議を戦わしたものでした。若かったのですね。

トロイロについては、先に書いたように、ガルデルや、カナロ、などを聴く前にトロイロを、まず聴いたのです ~ それも偶然に・・・これが、アルゼンチン・タンゴなのだ、ということでレコード屋に行って、クリスマス・レコードを探しました。そこですぐにあったかどうかは、覚えていません。とにかく最初買ったのは、レスポンソ (裏面は ウナ・カンシオン?) だったと記憶しています。

プグリエセの強烈な演奏に対して、トロイロはアンサンブルの素晴らしさ ~ あの、クリスマス・音の悪さでは感じることは難しかったのですが、とにかく全く違うものを感じたのは事実です。トロイロは、まず、tk時代のものを聴き、そのあとで

1940年代の、「ビクターの第1期」を聴いたこととなります。

フリオ・パネ ~ この人のバンドネオン・ソロは、「新感覚」とでも表現できるのでしょうか・

この曲を、即興で弾いている、という（CD: epsa 0791-02）～最後の1曲だけはそうではない～だいぶ前になりますが、ソロ・タンゴという番組をテレビで見ました。この時トリオでの演奏をやっていましたが、トロイロとか、レオポルド・フェデリコとは全く違う、名人の一人だと思いました。

チケは、ほかにたくさん名演もありますが、あえてフリオ・パネを第3位に選びました。

## 小林 謙一 (横浜市)

### 1. Osvaldo Pugliese y su orq, típ. 1953

誠にバランスのとれた素晴らしい演奏で、個々の力量の発揮とPuglieseによる緻密な完璧なオーケストレーションの結実と思います。

古い話ですがJuan Canaroが初めて来日公演を行ったとき、羽田に迎えに行かれた中南米音楽の故中西社長がこのオデオンの盤（勿論SP）を貰って大事に抱えて、雨の中をミロンガに持ってこられた思い出の盤です。居合わせた一同は興奮して声も出ず、私は余りの素晴らしさに涙が止まりませんでした。これが私が最初に聞いたChiquéでした。

### 2. Francisco Canaro y su orq,típica 1929

セリエ・シンフォニカのこの録音は、東芝音楽工業からFrancisco Canaro 3回忌追悼記念盤としてLP 3枚組に収録されたものです。既に幾つかこの品性豊かなChiquéを聴いていた後でしたが、これはSentimiento溢れる最高ランクの一枚と思います。特に終盤転調した後のビオリンの美しさ、切なさはタンゴの魂そのものと思われま。この3枚組に添えられた解説書では故中島栄司氏の賛辞から始まり、故大岩祥浩氏の「カナロの生涯」、故中西義郎氏の「カナロ老ツルの一声」共に含蓄深い読み応えのあるところ。更に録音年代別の曲目解説を1927～36までを島崎長次郎氏、1937～53を故蟹江丈夫氏、1953～64までを故石川浩司氏が担当執筆されており、現在においても貴重な資料の一つとして手元に止める価値ある存在です。

### 3. Pedro Maffia y su orq, típ. 1930

第3位は迷いに迷った挙句の一枚です。手持ちには54種のChiquéがありますが、さて次の一枚というと正直なところ困惑して手が止まります。Julio de Caro良し、Aníbal Troilo良し、勿論Brignoloの自作自演も、Cátulo Castilloも捨て難い。新しいところではBaffa=Berlingieri Tríoも取り上げたい。。。と思い悩んだ末のMaffiaです。

作者と同じバンドネオン奏者であり、その流れにTroiloもOrtizもあること。そして最大のポイントはChiquéと言う曲の持つ品格に真っ向から取り組んでいるケレンミのない演奏に惹かれるからです。

因みに私の名刺の左肩にはChiquéの楽譜のイントロ部分が印刷してある程惚れているタンゴで、今回の企画を立てられた編集委員会に御礼を申し上げて「了」とします。

## 盛 教 (埼玉県北本市)

### 1. O.Pugliese オデオン 55695A (53年)

長い年月に幾多の楽団が秘術を尽くして名だたる名曲に繰り返し挑む。それらの名曲名演に精通し、通曉すればする程、その選定は至難を極め通常なら懊悩する筈です。古来「知る者は言わず、言う者は知らず」と言われますが、なあと好きなものを選べばいいんですよ。だけんど、選んだ理由の文言化に困惑しました。

なにしろ、遠いタンゴレコード飢餓時代のことだから往時茫々。思い起こせば、戦前からのタンゴの大先達がこのSPを聴かせてくれた。のっけから、一太刀浴びせられ、強力なリズムと圧倒的な緊迫感、精緻に配されるソロ、……。驚天動地というか殆ど呆然自失。それまで聞かされた他のレコードは何んだったんだ。(マフィアさん、ドナートさん御免なさい)

その後著名な楽団の様々なチケーを拝聴しましたが、曲想を最大限生かした編曲の妙と全編飛躍的な演奏力で、これは今でも雲上の霊峰です。

### 2. A.Troilo TK S5115 (52年)

プグリエーセはこのチケー辺りから頂点へ駆け抜けたが、一方、ビクターで一定の成果と評判を獲得したトロイロは、TKでは新旧名曲を織り交ぜて重量感と柔軟性を発揮しつつ自在に演じております。何よりも我々にゆっくりと鑑賞する余地を与えてくれます。これはビクターに続く2回目の録音でそれだけに自信と安定感が横溢しております。50年代、総じて或いは個別的でもトロイロは、プグリエーセの後塵を拝しているという風説を信じません。例えば、ラ・ボルドーナとビエン・ミロンガについて両楽団の演奏を聴き比べてご覧なさい。

### 3. A.Piazzolla TK S5026 (50年)

プグリエーセは若い頃からデカロの作品を中心に習作を重ね、ピアソラも同様の作品で修業を積んでいます。これはピアソラらしくないというか、ピアソラらしくなる直前の演奏で、このあたり迄なら真面目に聴ける。裏面はトリステで出色の演奏。

## 清水 裕 (杉並区)

### 1. フルビオ・サラマンカ楽団 EMI ODEON 1957年録音

彼が独立した1957年はタンゴ界も逆風のさなか。これに立ち向かうように、ダリエンソ譲りの鋭いスタカットと華麗なピアノはもちろんのこと、他のパートにも気配りした編曲で新風を吹き込もうという意気込みを感じる。

### 2. フランチャーニ=ポンティエル楽団 RCA VICTOR 1972年録音

1973年来日記念盤。来日時はポンティエル楽団にフランチャーニが客演といった形だっ



たが、これは1972年ブエノス・アイレスで、メンバーは半々、ピアノは二人いないのでノルマンド・ラサラが担当し、オマール・バレンテはバンドネオンに回った。フランチャーニのバイオリンが素晴らしく、録音も良く聞き応えたっぶり。

### 3. ラウル・ハウレーナ楽団

SONDOR 2008年録音

今米国で活躍するウルグアイ出身のバンドネオン奏者。六重奏団の2000年録音もあるが、この録音はやや弦を多くした11名編成で、音に厚みがあり澄んだ音色が気持ち良い。

## 森 正樹 (港区)

### 1. フルビオ・サラマンカ楽団

1957年録音

なんといっても当楽団の演奏に尽きるでしょう。この曲と初めて出会ったのは、1960年の夏、新宿の喫茶店「まりも」だった。当時の私はタンゴを聴き始めて数ヶ月、当然この曲名も知らないし、聴き覚えのないメロディーだった。いや、もしかしたら他の楽団の演奏を聴いていたかも知れない。だが全く印象に残っていなかった。ところが聴こえてきた演奏がやたらと新鮮に感じた。カナロにもフィルポにもフレセドにもない音を感じた。コントラバス→バイオリン→ピアノ→バンドネオンと各楽器のリレーが鮮やかでスピード感があり、コントラバスのパートになるとスピーカーの前で耳を傾けたりした。以来「チケ」と言えばサラマンカ、サラマンカと言えば「チケ」という強烈な印象を一生植え付けられてしまった。

### 2. オスバルド・プグリエーセ楽団

プグリエーセほどこの曲の聴く機会を与えてくれた楽団は他にない。例えば1979年と89年の来日公演、82年ブエノス・アイレスでのテレビ局や劇場のコンサート、88年コロロン劇場のライブ映像、そして53年と85年録音のレコードによって親しむことができた。聴いていて感じることは、どの演奏も流麗にして豪壮な演奏は他に類をみない。

### 3. 該当演奏者はおりません。

名曲がゆえ演奏者は多い。しかしその割には名演奏が少ない。この曲は単純なタンゴではなさそうだが、手強い作品のように思える。



## Chiqué (1) (1920)

Letra y música : Ricardo Luis Brignolo

(Ricardo C. De León というペンネームで発表したもの)

俺はもう気分が悪くなりそうだ そんなお前を見ていると  
とてつもなく着飾っている それに あの馬鹿な男を見ていると  
金はたんまりあってお前を買った男 お前を傍に置いておきたくて  
あいつには判らんだろうなあ 明日にでもお前が逃げ出して  
古い我が家に戻ることが 古い思い出と楽しかったことが  
お前を有頂天にしたあの部屋へ

覚えているぜ お前はギンダより綺麗だった  
100ペソ札でも買えはしない  
いつも午後になると散歩に来たな 狐の毛皮を身につけて  
行ったり来たりは魅力があったぜ  
男の子が群がって 何処に行っても待ち受けていて  
いろいろ言葉をかけたものだ  
俺ももちろんそうしたのだが

そして今 あの頃はとうの昔  
俺は本気でお前を愛するつもりだ  
お前がして来たことは判るさ  
俺には決して恰好を付けなかったな  
だから俺はいつもお前に向き合ってきた  
人生のどんな時にもだ  
俺の宝、俺が惚れた相手だよ  
俺は筋を通すぜ 筋を通すぞ俺も

アンケート「Chiqué 3曲選」にさらに多くの皆さまにご応募頂きたく存じます。



「Chiqué」(1920年発表とされる)に異なる歌詞が三つあることをご存知の方も多いでしょう。しかし、この曲は名曲として名高いものですが、歌詞が歌われることの少ない曲としても知られています。

1943年からアルゼンチンでは“検閲”の時代(1949年まで続く)が始まります。当時の政府(大統領Pedro Pablo Ramirez 将軍 在位1943-44)は国語(即ちスペイン語)の純粹さを保持する目的で、教育相Gustavo Martínez Zuviríaの指揮下で大司教Gustavo Franceschiを長とする委員会を設置します。タンゴではlunfardo(隠語・符牒)やvoceo(2人称にtúを使わないでvosを使うこと)を使用禁止の対象とし、さらにlunfardoでなくても“下品”な(と判断される)言葉遣いは変更を強制されました。言語の浄化だけでなく労働運動を鼓舞するような(内容のタンゴもありました。「Al pie de Santa Cruz」など)宣伝活動も標的にされました。

タンゴで良く知られた例では「Tal vez será mi alcohol」(多分私の酔いのせい?)のalcoholが「Tal vez será su voz」(あなたの声かしら?)となり「La casa de mis viejos」(viejosは親父・お袋・爺さま・婆さまという語感)が「La casa de mis padres」(padres両親)と変更されています。

そして同様に「Chiqué」という題名も穏当な言葉遣いの「Elegante」と改称させられました。作者のR. Luis Brignolo自身が書き変えた第2作の歌詞は、検閲当局に向かって“これなら文句は言えないだろう”と言っているような“上品”なというか“平凡”な言葉遣いをしているように思えます。次号でご紹介します。原詩はインターネットでLetra-Dと検索すれば出て来ます。(1)(2)という番号もLetra-Dが付けているものを借用しました。ちなみに歌詞は(3)まであります。(3)の歌詞は別人の作です。

第一次ペロン政権(1946-55)下の1949年にディセポロを筆頭に芸術家たちはペロンと話し合いを行い、この年にタンゴの歌詞の検閲を撤廃させました。ペロンとディセポロは仲が良かったそうです。ディセポロは忠実なペロニスタ(ペロン派)の代表のひとりであり、そのことで同世代の反体制派の芸術家たちの恨みを買ひ、軽蔑されたそうです。

(以上todotangoなどから)

# 日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎関西リンコン 日 時：5月18日（日）  
会 場：「サロン・ド・あいり」
- ◎東京リンコン 日 時：5月20日（火）  
会 場：「原宿クリスティー」
- ◎中部リンコン 日 時：6月29日（日）  
会 場：（未 定）
- ◎セミナー 日 時：5月18日（土）  
会 場：「東医健保会館」

## 会 員 動 静

（2014年4月10日現在 183名）

### 入会者

小澤 忠（秋田市） 阿部和子（港区）

### 退会者

阿部修英（川崎市） 荒井朋子（川崎市） 勝俣秀夫（さいたま市）  
小松亮太（新宿区） 田中 輝（杉並区） 長谷川葉子（名古屋市）  
堀行麻衣子（板橋区） 遠藤隆也（逝去）（津山市）

## 次号の原稿締め切り日

Tangueando en Japón（2014年7月発行）：2014年5月31日

Tangolandia（2014年10月発行） 2014年9月30日

### 編集後記

本号もお陰さまで盛りだくさんの内容となりました。紙数の都合で次のTangueando誌に掲載させて頂くことになった方もあります。どうしても日頃接触の機会が多い方々に出稿をお願いしがちになります。出来るだけ多くの方々にご登場頂きたいと考えておりますので、どうか気軽に“こんなことを書いて見たい”とか“こんな行事を行っている”などと編集部にお知らせ下さい。掲載時期などのお打ち合わせをいたします。（大澤）

## 日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品） 第28号 2014年4月 発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー  
〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104（飯塚方）  
電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛（編集長）〒162-0051  
東京都新宿区西早稲田2-1-23-609  
TEL 03-3208-2247  
E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

齋藤 富士郎・弓田 綾子・宮本政樹・島崎長次郎

表紙デザイン：脇田 富水彦